

アイルハルト・フォン・オーベルク作
『トリストラント』の特質
——ゴットフリート作品との比較において——

石川 栄作

**Zum Charakteristikum von Eilharts »Tristrant«
im Vergleich mit Gottfrieds »Tristan und Isolde«**

Eisaku ISHIKAWA

Abstract

Der Originaltext »Etoire« der Geschichte von Tristan und Isolde, dessen Ursprung unverkennbar aus der keltischen Sagenwelt stammt, entstand Mitte des 12. Jahrhunderts als ein altfranzösisches Versepos in England oder in Frankreich. Auf Grund dieser Urgestalt »Etoire« erschienen später das französische Epos Bérrouls (1179-80), das mittelhochdeutsche Versepos Eilharts von Oberg (1170) und das altfranzösische Epos von Thomas (1172-75). Die Werke von Bérroul und Thomas sind aber nur fragmentarisch überliefert. Zum Glück ist Eilharts Epos vollständig überliefert. Gerade darin ist sein Werk wertvoll. Außerdem können wir die verlorenen Episoden von Thomas durch das mittelhochdeutsche Epos Gottfrieds von Straßburg (1200-10) ergänzen. In der vorliegenden Arbeit vergleichen wir immer Eilharts Werk mit Gottfrieds und Thomas' Epos, um das Charakteristikum des Werks von Eilhart klar zu machen.

Die Gesamthandlungen der Geschichte von Tristan und Isolde können wir in 4 Blöcke teilen: Der 1. Block enthält den Geburt und die Aufzucht der Hauptperson und seine spätere Reise für Ausbildung. Der 2. behandelt die Werbung des Königs Marke um die Königin. Der 3. beschreibt das

Rendevous der Liebenden. Der 4. entwickelt die Geschichte von Tristan und Isolde Weißhand. In diesen 4 Blöcken sind die Geschichte Eilharts erheblich von Gottfrieds und Thomas' Werken wie folgend verschieden.

Im 1. Block tritt der Vater der Hauptperson bei Eilhart als König Rivalin von Lohnois in Schottland oder in Südweste auf, während er bei Gottfried als König Riwalin von Parmenie in Britannien erscheint. Der Vater bei jenem überlebt auch nach dem Geburt Tristrants, aber der bei diesem stirbt vor dem Geburt Tristans. In den Punkten von der Aufzuehung und der Ausbildungsreise charakterisiert Eilhart die keltische Atmosphäre, aber bei Gottfried fühlt sich die Stimmung der mittelalterlichen höfischen Ritterwelt.

Im 2. Block findet sich bei Eilhart die aus der keltischen Sage stammende Episode vom blonden Frauenhaar der Schwalbe, aber bei Gottfried gibt es keine solche Episode. Bei diesem verändert es sich zu der anderen Episode, wo die Neider am Hof dem König Marke vorschlägt, auf Tristans Verderben sinnend, ihn zum Brautwerber nach dem feindlichen Irland zu bestimmen. In den Punkten von dem Kampf mit dem Drachen und von der Splitter des Schwertes sind die beiden Werke mehr oder weniger verschieden. Besonders in der Episode des Liebestranks findet sich der auffällige Unterschied zwischen den beiden: bei Eilhart führt der Genuß dieses Tranks zu vierjährigem Liebeszwang, bei Gottfried ist aber solcher Termin nicht festgesetzt. Bei jenem verstärkt sich das keltische Element und bei diesem ist das mittelalterliche ritterliche Merkmal gefärbt.

Im 3. Block wirft Tristrant bei Eilhart zum Zeichen des Stelldicheins in den Bach die ein Kreuz geschnittenen Holzsplitter, wenn er Isalde heimlich treffen möchte. Dagegen wirft Tristan bei Gottfried zum Zeichen des Rendevous in den Bach die die Initiale T und I ihrer Namen eingeschnittenen Holzsplitter, die kunstvoll das höfische Merkmal symbolisieren. In den Punkten von dem späteren Waldleben ist bei Eilhart die Atmosphäre von der primitiven keltischen Sagenwelt überall überliefert, aber bei Gottfried entwickelt sich die Episode von der Minnegrotte, die eindrucksvoll an den höfischen Minneroman erinnert.

Im 4. Block sind die Entwicklungen der Handlungen zwischen den beiden Werken erheblich verschieden. Der Anlaß der Heirat Tristrants (Tristans) mit Isalde (Isolde) Weißhand ist bei den beiden auffällig unterschiedlich. Besonders bei Eilhart entwickelt sich die Episode von Nampetenis und Gariole, die sich bei Gottfried nicht findet. Die Ursache des Todes jedes Helden ist auch bei den beiden einander anders. Der Tod Tristrants bei jenem steht in engen Beziehungen mit der Episode von Nampetenis und Gariole, während der Tod Tristans bei diesem mit der neuen Episode von dem Zwerg Tristan zusammenhängt. In den letzten Szenen auch findet sich der Unterschied der beiden: bei Eilhart ist die Episode von der festen Verbindung des Rosenstocks mit dem Weinstock hinzugefügt, die

sicherlich aus der keltischen Sagenwelt stammt, bei Gottfried aber keine solche Episode.

Aus den Untersuchungen ergibt es sich, dass Eilharts Werk ganz verschieden von Gottfrieds Epos ist: bei jenem ist das Element der keltischen Sagenwelt überall überliefert und bei diesem entwickelt sich überall neu das Merkmal des mittelalterlichen höfischen Epos. Und Eilhart entwickelt mit dem schnellen Tempo die Geschichte der Liebenden, während Gottfried die Geschichte innerlich vertieft. Besonders das vollständig überlieferte Versepos Eilharts ist wertvoll in dem Punkt, dass wir damit den ganzen Umriss der Urgestalt »Eστοire« von der Geschichte »Tristan und Isolde« überblicken.

序

トリスタンとイゾルデの悲恋物語に関する伝説がもともとケルト世界に起源を持っているということは、以前から一般に認められてきたことである。主人公の一人トリスタンという名称は八世紀末にスコットランド北部を支配していたピクト人の王の息子ドゥルスト(喧騒、嵐の意味)に遡り¹⁾、もう一人の主人公イゾルデの名称もケルト・ピクト語のイシルト(神秘的な姿の意味、「生命の水」の象徴)に遡る²⁾と言われている。そのほか、この物語がケルトの世界を舞台にしていることから、また作品の中にはケルトの社会環境や風習が描かれていることなどからも、この物語がケルト起源であることが実証される。

さらにトリスタン伝説が生まれるにあたっては、ケルトのいくつかの伝説が影響していたことも確かなこととされている。そのケルト伝説の中でも九世紀にアイルランドで生まれた『ディアミッドとグライーネの駆け落ち』³⁾と『デアドラとウスナの子たちの死』⁴⁾はとりわけ大きな影響を与えたと考えられる。いずれも女性の方がイニシアティブをとって男性と一緒に逃げるという「駆け落ち譚」である。これらの伝説が十一世紀後半になってウェールズの地と、さらにはブルターニュの地にも伝承されて、それらを基にしてさまざまなトリスタンとイゾルデに関する伝説が生まれ語り継がれているうち、十二世紀半にはイギリスあるいはフランスにおいて古フランス語によるトリスタン伝説の原典(エスト

1) ゴットフリート・フォン・シュトラースブルク(石川敬三訳)『トリスタンとイゾルデ』郁文堂1976年351ページおよびミシェル・カズナーブ(中山真彦訳)『愛の原型——トリスタン伝説——』新潮社1972年28ページと186ページ参照。

2) ミシェル・カズナーブ(中山真彦訳)前掲書68-69ページ参照。

3) 佐藤輝夫『トリスタン伝説——流布本系の研究』中央公論社1981年64-93ページ参照。

4) 佐藤輝夫:前掲書93-100ページ参照。

ワール) が成立したと推定される。そのケルト伝説からトリスタン伝説に移行していく段階で、特に『ディアミッドとグライーネの駆け落ち』に見られた「呪い」(ゲイス)のエピソードは削除されて、それに代わってトリスタン伝説に特有なものとして「フィルトル」(愛の飲料)が物語の中に取り入れられた。この「愛の媚薬」の導入によって、単なる「駆け落ち譚」でしかなかった物語が、イギリスあるいはフランスの恋物語に書き改められ、それにさまざまなエピソードが付け加えられて、トリスタン伝説の原典(エストワール)が出来上がったのである。

その原典は残念ながら遺されていないが、しかし、その原典を素材として独自の新たなトリスタン作品を書いたと推定される詩人が三人いる。一人目はフランスの詩人ベルール(Béroul)、二人目はドイツの詩人アイルハルト・フォン・オーベルク(Eilhart von von Oberg)で、三人目はフランスのトマ(Thomas)である。いずれもトリスタン伝説の原典を素材として十二世紀後半にそれぞれのトリスタン物語を書き上げている⁵⁾。ただフランスのベルールとトマの作品については、写本の一部しか遺されており、全体像は把握できない。幸いなことに、ドイツのアイルハルトの作品『トリストラント』(Tristrant)は十五世紀の写本で完全に伝えられており、トリスタン伝説の原典がどのようなものであったかを、ある程度大まかに知ることができる。その点でアイルハルトの作品は存在価値がある。

また一方、トマの作品において欠落している部分については、トマの作品を素材にしたというゴットフリート・フォン・シュトラースブルク(Gottfried von Straßburg)の叙事詩『トリスタンとイゾルデ』(1210年頃)があり、アイルハルトの作品と比較することができる。その二作品を比較してみると、ベルール系に属するアイルハルトの作品はトマ系に属するゴットフリートの作品とはかなり異なっているようである。

そこで本稿では、アイルハルトの作品『トリストラント』⁶⁾を四つの物語ブロック——第一ブロック「トリストラント(トリスタン)の出生と養育と修業の旅」、第二ブロック「マルケ王の求婚」、第三ブロック「恋人たちの逢瀬」そして第四ブロック「白い手のイーザルデ

⁵⁾ それぞれの作品の制作年代についてはさまざまな説があるが、とりあえず本稿ではダニエル・ブッシンガーとヴォルフガング・スピーヴォーク(Danielle Buschinger/Wolfgang Spiewok: *Tristan und Isolde im europäischen Mittelalte*. Reclam 1991)の意見に従い、ベルールの作品は1179-80年、トマの作品は1172-75年の成立とし、またアイルハルトの作品は1170年の成立としておくが、1185年ないし1190年頃とする説もあることを付け加えておく。佐藤輝夫：前掲書59ページ参照。

⁶⁾ テキストにはFranz Lichtenstein (Hrsg.) : Eilhart von Oberg. Georg Olms Verlag Hildesheim・New York 1973.を用いる。なお、佐藤輝夫氏の前掲書にはアイルハルトの作品について言及している部分が多いので、本稿において邦語で説明する部分については、それを最大限に活用させていただく。

(イゾルデ)」——に分けて、常にゴットフリートの作品⁷⁾と最後にはトマの作品と比較しながら、最初から最後まで順番にあらすじの展開を迎えることによって、初期の段階におけるトリスタン伝説の特徴などを探り出すことにしたい。

第一章 トリストラント(トリスタン)の出生と養育と修業の旅

1. トリストラント(トリスタン)の出生と養育

アイルハルトの作品では、ゴットフリートの作品と同じように、最初に主人公の両親に関するエピソードから始まっているが、両者はまったく異なったものとなっている。

まずゴットフリートでは主人公の父リヴァリーン(Rivalin)はブルターニュにあると考えられるパルメニーエ(Parmenie)の国王で、主人公が誕生する前に戦死することになっているが、アイルハルトにおいてはスコットランドあるいは南ウェールズあたりのローノイス(Lohnois)王リヴァリーン(Rivalin)として登場し、主人公の出生後も生き延びて物語の展開に少なからず関与している。

リヴァリーン王がコーンウォールのマルケ(Marke)王のもとに出かける動機についても、両者間では異なっている。ゴットフリートではリヴァリーン王は、ブルターニュの大公モルガーン(Morgân)と戦って、和平を結んだのちに、その頃名望が高まりつつあったマルケ王の噂を聞いて、コーンウォールへ出かけているのに対して、アイルハルトではスコットランド王と戦っていたマルケ王を援助するために出かけている。

このようにコーンウォールに出かける動機が異なっていれば、またそのあとのマルケ王の妹とリヴァリーン王の結びつきにも若干相違が見られる。ゴットフリートではリヴァリーン王はマルケ王の城で催された騎士の試合において卓抜な腕を見せることで王妹ブランシェフルール(Blanscheflûr)の心を捉えたのであり、二人の恋愛は秘められたものとして展開されている。すなわち、そうしているうちに敵軍が襲ってきたときリヴァリーン王は重傷を負うが、ブランシェフルールが変装して病床の彼を訪ねて、この世で最高の歓びを享受した折り、子供を身ごもってしまうのである。

これに対してアイルハルトではもともとマルケ王の援助のためにコーンウォールへ出かけたリヴァリーン王は、その生命を賭した功績によってマルケ王の妹ブランケフルール(Blankeflûr)の愛をかち得て、彼女を妻として連れて帰国することがごく簡単に語られて

⁷⁾ テキストには Gottfried von Straßburg : Tristan. Nach der Ausgabe Reinhold Bechstein herausgegeben von Peter Ganz. Etster Teil und Zweiter Teil. F. A. Brockhaus Wiesbaden 1978. を用い、邦訳で説明する部分については、石川敬三訳による前掲書を最大限に活用させていただく。

いるだけであり、ゴットフリートのように二人の恋愛が秘められたものとしては展開されていない。その点で両作品は若干異なっている。

二人の恋愛が上記のように両作品間で若干異なっただけで展開されているならば、二人の間に主人公が生まれる場所もその事情も、またその後の養育についても当然のことながら異なってくる。ゴットフリートではかつての敵モルガンが再度故国を侵略したとの知らせが入ったので、リヴァリーン王はただちに帰国することになったが、その際マルケ王には内緒でその妹を連れて帰国し、正式に結婚式を挙げるものの、その歡びも束の間、モルガンとの熾烈（しれつ）な戦いで戦死してしまう。その知らせを受けたブランシェフルールは男子を出産するや否や、その悲しみのために死に、その幼子は人目を避けて忠義者の主馬頭ルーアル(Ruál)夫妻に引き取られ、二人の間の子として、「悲しみ」(triste トリステ)に由来する「トリスタン」(Tristan)という名前を付けて、育てられた。最初の七年間はそのルーアル夫人に養育されたが、その後一人の聡明な人物を付けて遊学のために外国に送られ、トリスタンはそこで語学と武芸を修めて、十四歳のときにパルメニーエ国の故郷カノエール(Kanoël)に戻って来るのである。

これに対してアイルハルトではスコットランド王との戦闘が終わると、リヴァリーン王は妻を連れてコーンウォールをあとにするが、妻はそのときすでに身ごもっており、船が沖に出たとき、激しい苦しみを覚えて、そのために死んでしまった。しかし、子供は母親の身体を切り裂いて取り出され、ローノイスに着くと、「トリストラント」(Tristrant)と名付けられた。リヴァリーン王は妻を亡くしてたいへん悲しんだが、その幼子を乳人(めのと)の手に委ねて、育ててもらった。やがてその子供が馬に乗れるほどに成長すると、侍従クルネヴァール(Kurnevál)のもとに預けて、さまざまな教育を施させたのである。

このように主人公トリストラント(トリスタン)の出生と養育については、アイルハルトとゴットフリートとはかなりの相違が認められ、前者では主人公の教育のことがかなり詳細に述べられているものの、そこに至るまでのあらすじはごく簡潔にスピーディに展開されているのに対して、後者では主人公の両親の物語が、のちの主人公たちの悲恋を暗示しているかのように、秘められたものとしてかなり詳細に展開されている。アイルハルトとゴットフリートでは明らかに相違があることは容易に理解されよう。

2. マルケ王に仕えるトリストラント(トリスタン)

次の主なエピソードは、トリストラント(トリスタン)がコーンウォールのマルケ王に仕えることであるが、それまでの経過についても両作品ではかなり異なったものとなっている。

ゴットフリートでは外国で語学と武芸を修めて故郷カノエールに戻って来たトリスタン

は、ある日、ノルウェー船が停泊したのがきっかけとなって、その船員たちによって誘拐され、その後、さまざまな苦難を乗り越えて、しまいには遭遇した巡礼者たちとともにコーンウォールの都ティンタヨーエルに向けて出発するさまが詳細に語られている。そのあとトリスタンはそのマルケ王のもとで狩猟をしたり、堅琴を弾くのみならず、数々の曲をブルターニュ語、ウェールズ語さらにラテン語で朗唱したりして、人々から賞賛的となり、またマルケ王もこの若き芸術家に友情を誓ったことが実に詳細に展開されている。こうしてトリスタンがマルケ王のもとで過ごしているところへ、忠義者のルーアルがや々と探し当ててやって来る。ここでルーアルが打ち明け話をするでもって初めてトリスタンはマルケ王の甥だと分かり、中世騎士社会を彷彿とさせる刀札式を授けられたあと、一旦故郷カノエルに帰国してから、領国をルーアルに与えて、再度マルケ王のもとへ出かけることになっている。ゴットフリートではさまざまな話が織り込まれて、物語が拡大されていることが明らかである。

これに対してアイルハルトになると、マルケ王に仕えることになるさまがスピーディに語られている。すなわち、トリストラントがさまざまな面で成長を遂げると、侍従クルネヴァールは彼に対して異国へ出かけて、広く世間を見ながら、さまざまな作法を学ぶことを勧める。この進言に従ってトリストラントが父リヴァーリン王に旅立ちの許可を願い出ると、王は息子の志を喜ばしく思い、ただちに旅立ちの準備を整えさせ、その用意も整うと、トリストラントは家臣を連れて、コーンウォールをめざして海を渡った。その国ではトリストラントは伴の者たちに自分の素姓を明かさぬように命じてから、マルケ王の宮廷へ馬を進めた。トリストラントはそこで丁重に出迎えられ、マルケ王に召し抱えられて仕えることとなった。王は宮廷内の一切を取り仕切っているティーナス(Tinas)という名の内膳頭(ないぜんのかみ)にトリストラントの身を委ねたが、ティーナスは彼に対していろいろと世話を怠らなかつた。このようにアイルハルトでは余分な話は織り込まれておらず、トリストラントがマルケ王に仕えるさまが簡潔明瞭に語られていることが容易に理解できよう。

3. モーロルトとの闘い

トリストラント(トリスタン)がマルケ王のもとに滞在していたその頃、アイルランドにモーロルト(Mórlot)という勇士がいた。この勇士との闘いが次のエピソードである。モーロルトは妹をアイルランド王に嫁がせていて、その勇猛な力でもって周辺の強敵をアイルランド王の支配下に置いていたが、コーンウォールだけは貢ぎ物を拒否し続けていたので、彼は戦いを挑んできたのである。そこでトリストラント(トリスタン)がその挑戦に応じることとなる。このモーロルトとの一騎打ちについては、両作品では若干の相違こそあれ、

大筋においてはほぼ同じである。

アイルハルトに従って、ゴットフリートとの若干の違いも盛り込みながら、そのあとの展開を辿っていくと、モーロルトはマルケ王に使者を送って十五年間(ゴットフリートでは十四年間)も怠っていた貢ぎ物(十五歳になる子供たちのうち三分の一、ゴットフリートでは十四年間に生まれた子供たちのうち三人に一人)を要求してきた。ただ自分との一騎討ちに挑む由緒正しき血筋の勇者がおれば、その者と果たし合いをして雌雄(しゆう)を決したいとも伝えてきた。このようにアイルハルトではモーロルトとの決闘に挑もうとする者は「彼と同等の身分の者でなければならない」という条件を付けているが、ゴットフリートではすでにトリスタンはマルケ王の甥であることが忠義者ルーアルによって明らかになっているので、その条件は削除されている。ただアイルハルトではまだトリストラントが由緒正しき者であることが表明されていないので、モーロルトとの決闘の話聞いたトリストラントは、その決闘に応じる意志のあることをマルケ王に伝えるとともに、自らがここで初めてマルケ王の妹の息子であることを打ち明けるのである。マルケ王はこれを聞いて歎びに心を震わせると同時に、甥のことを心配して心が曇りゆくのを抑え切れなかった。マルケ王は甥に決闘を思い止まるよう説得したが、トリストラントの決意は動じなかった。こうして決闘が3日後に海上の小島で行われることになったのである。

この小島での決闘場面についてはアイルハルトとゴットフリートの間では、多少の相違が認められる。アイルハルトではトリストラントは船に乗り込んで、一人で決闘の小島に着くと自分の船は繋いで、モーロルトの船を押しやり流してしまう。「どうしてそのようなことをするのか」と尋ねるモーロルトに、トリストラントは「生きて帰るのはただ一人のみ」と答える。このような台詞はアイルハルトだけに見られる特有なものである。さらにアイルハルトはこうして始まった決闘のさまをかなりの分量を費やして、詳しく展開させている。その描写方法はシャンソン・ド・ジェスト(戦記文学)において見られるものと同じと言ってもよい⁸⁾であろう。二人は激しくぶつかり合い、長い闘いの末、ついにトリストラントがモーロルトの手を斬り落とし、頭にも剣の一撃を喰らわせると、モーロルトは倒れ伏した。彼の頭にはトリストラントの剣の破片が突き刺さったままであった。闘いはトリストラントの勝利に終わったが、しかし、彼もまた相手の毒槍に傷つけられていた。この場面でゴットフリートに特有なのは、モーロルトがトリスタンの太腿(ふともも)に一撃を与えたとき、彼がトリスタンに対して「その傷を治すことができるのは、私の妹であるアイルランドの王妃だけだ」と明言していることである。アイルハルトではただ作者に

8) 佐藤輝夫：前掲書260ページ参照。

よってそれが明らかにされているだけで、トリストラント本人は知らないことになっている。この両者の違いは当然のことながらのちのあらすじの展開にも大きな影響を与えることとなり、注目すべき点である。

さて、闘いに勝ったトリストラント(トリスタン)はマルケ王に歓び勇んで出迎えられたが、一方、アイルランド勢は悲痛な思いに包まれていた。この場面でアイルハルトでは人々はアイルランド王の娘イーザルデ(Isalde)のもとへ使者を送り、伯父を救い出してほしいと願った。彼女は医術に長(た)けていて、その名声は諸国に及んでいたからである。姫イーザルデは急いで伯父モーロルトのもとに駆けつけたが、伯父はすでに息絶えていた。彼女は涙に暮れながら、亡骸の傷をあらためようと近づくと、その傷には剣の破片が突き刺さったままだったので、それを引き抜き、大切に保管した。このように剣の破片を保管しておくのは、アイルハルトでは姫イーザルデである。ゴットフリートでは娘イゾルデ(Isolde)ではなく、その母であるアイルランド王妃イゾルデ(Isolde)とされている。このことが両作品におけるその後の展開に大きな違いを見せており、その違いは次に展開されるトリストラント(トリスタン)の癒しの旅と秘薬による傷の快癒において明らかに認められる。

4. 癒しの旅と秘薬による傷の快癒

モーロルトとの決闘において毒槍で重傷を負わされたトリストラント(トリスタン)は、日一日と身体が弱っていくばかりなので、ついにコーンウォールの海岸を離れていくことになるが、アイルハルトの場合は、上ですでに述べたように、トリストラントは自分の傷を癒してくれる者を知らないで、ただ幸運に見捨てられなければ、救いの地へ運ばれるかもしれないという一縷(いちる)の望みを抱いて、剣と堅琴だけを携えて行き先も定めずに、小舟で沖に出た。そうしてその小舟が風によって運ばれて行ったのは、アイルランドであった。これに対してゴットフリートではトリスタンの傷を癒すことのできる者はモーロルトの妹、すなわち、アイルランド王妃イゾルデだけであることを知っているので、トリスタンは最初からアイルランドを目指して従者たちを従えて船出することになっている。両作品は好対照を成していることが明らかである。

アイルランドに着いて傷を癒してもらう場面でも、当然のことながら両者は異なる展開となっている。アイルハルトではトリストラントは瀕死の状態であイルランドの岸边に流れ着くが、アイルランド王によって発見され、城内に運ばれると、王の質問に対して、「私はプロー(Prö)という名で、故郷はイェムゼティア(Jemsetir)。商人で楽人でもあるが、航海の途中難破して、重傷を負い、ここに流されて来た」と答える。王は娘イーザルデに使いを送り、負傷者のために薬を調合するように求めた。彼女はさっそく薬を届けたが、何

の役にも立たなかった。彼女は傷に毒が入っていることを悟り、今度はそのような傷に効き目のある秘薬を用意した。それを使うと、トリストラントはたちまち快方に向かい、その傷は快癒した。こうしてトリストラントの傷はすっかり治った。しかし、イーザルデ姫はこのたびのことでは救った者が何者であるかも知らず、またその姿を目にすることはなかったことになっている。

これに対してゴットフリートではアイルランドに近づくと、その都ダブリンの手前で錨を下して、トリスタンは一人だけ小舟に移り、随行者たちを帰国させた。翌朝、ダブリンの人々は小舟の中にトリスタンをを見つけ、楽人と称する彼から冒険譚と豎琴の弾奏を聴いて感嘆する。彼らはやつれた楽人をあわれに思い、医者への看護に委ねるが、回復の兆しは見えない。この噂が王妃イゾルデの耳にも達して、王妃は楽人を宮廷に連れて来させた。トリスタンは楽人タントリス(Tantris)と偽称し、王妃とその娘(母と同じ名前のイゾルデ)の前で豎琴を弾いて聴かせる。そのあと王妃が彼に治療を施すと、やがて傷も癒えてしまう。こうして回復したトリスタンは、音楽と外国語の教師として王女イゾルデに仕えることになるのである。

いずれにしても傷の癒えたトリストラント(トリスタンは)はやがてコーンウォールに帰ることになるが、そのきっかけも両作品では異なっている。アイルハルトでは、すなわち、その頃、コーンウォールの船舶の寄港を禁じていたアイルランドは、ひどい飢饉に苦しめられていたので、アイルランド王から助言を求められたトリストラントは、傷を治してもらった恩返しに、自らが食糧を手に入れて来ることを約束して、イングランドへ出かけて行き、食糧を求めて奔走し、食糧をアイルランド王宛てに送り出してしまうと、自らはコーンウォールの船に乗り込んで、伯父マルケ王のもとに帰って行くのである。

これに対してゴットフリートではこのまま長く滞在しておれば自分の素姓がばれてしまうのではないかとの不安から、王妃と王女に暇乞いを申し出て、マルケ王のもとに帰って行くことになっている。アイルハルトとゴットフリートでは、このあたりの展開に関してはかなりの相違があることが理解できよう。

第二章 マルケ王の求婚

1. マルケ王の求婚の使者

こうしてトリストラント(トリスタンは)はひとまずコーンウォールへ帰って、マルケ王のもとで暮らすうち、マルケ王が家臣らに強要されて結婚相手を探しに出かけるあらすじへと展開していくが、トリストラント(トリスタンは)がその求婚の使者となるエピソードに関してもアイルハルトとゴットフリートでは著しい相違が見出される。

まずアイルハルトではトリストラントはマルケ王からたいへん好かれて彼の後継者と定

められるが、そのことが宮廷の人々には不満で、彼らは王に妃を迎えるように進言する。トリストラントも王が妃を迎えようとしなないのは自分の目論見によるものであると疑われていることを知って、一緒になってマルケ王に結婚を勧めた。それでもマルケ王は王妃を娶ることを拒否したが、とりあえず何日か先まで返事を延ばすことにした。いかなる女性をも妻とする意志のないマルケ王は、その返事をすべき日がやってきて、どのように答えたらよいものかと考え迷っていたとき、二羽の燕(つばめ)が纏(もつ)れ合っているのを目にとめた。すると一本の美しく長い女の髪の毛がその二羽の燕から落ちてきて、それを拾い上げて、その髪の毛を持ち出して断り切れるやもしれないと思った。そこへトリストラントをはじめ、他の諸侯たちもやって来たので、マルケ王は「この髪の毛の持ち主以外の女と結婚しようとは思わない」と答えた。諸侯らはこの王の返事もトリストラントの入れ知恵によるものだったと言ったので、トリストラントは自らがその髪の毛の女性を探しに出かけることを口にした。内膳頭ティーナスがただちに一艘の船を用意し、トリストラントはその髪の毛を手にして、百名の騎士を率いて旅立って行くのである。

これに対してゴットフリートではどうなっているのか。宮廷顧問官たちはマルケ王に可愛がられているトリスタンに嫉妬を覚えて、マルケ王に結婚を勧めるものの、マルケ王がトリスタンを後継者に決めているからと言って結婚を断るに及んでは、トリスタンへの憎しみをますます強めていく。そこで彼らはトリスタンに難題を押し付けるために、トリスタン自らが礼賛してやまないアイルランドのイゾルデ姫との結婚をマルケ王に進言して、敵国の王女への求婚の使者としての役目をトリスタンに押し付けるのである。マルケ王は反対するが、トリスタンは逆にそれを承諾して、顧問官たちとともにアイルランドに向けて旅立って行くのである。行き先がはっきりしている点でアイルハルトとは異なっている。

このように両作品では行き先が定められているか否かの点で相違が見られるので、当然のことながら、アイルランドに到着した場面でも著しい違いが認められる。

アイルハルトから説明すれば、航海は一か月ほど続き、トリストラントは船員たちにアイルランドを避けて通るように命じていたものの、大時化(おおしけ)にあつて、船は高波に流されてアイルランドの方へ、しかもかつてトリストラントが傷を癒してもらったその城へと辿り着いた。アイルランド王はすぐさま主馬頭に到着した船の乗組員全員の首を刎ねるよう命じた。主馬頭がその船に出向くと、トリストラントは黄金の盃を贈り、「我々はイギリスの商人で、ここの人々が飢饉で苦しんでいることを聞いて、十二艘の船に食糧を積み込んで交易にやって来た」と説明し、自分はタントリス(Tantris)と申す者だと言った。ゴットフリートでは名前の前後をひっくりかえして名乗るのは、毒槍の傷を負って初めてアイスランドを訪れたときであったが、アイルハルトではこの二回目の訪問の場面に移されている。上記のようにトリストラントが話すのを主馬頭は信じて、さっそくそれを

国王に報告し、トリストラント一行はとりあえず首を刎ねられることは免れたのである。

これに対してゴットフリートでは最初からトリスタンはアイルランドを目指して船を進め、アイルランド王の滞在していたウェックスフォードの近くに来ると、町から弓で攻撃されても届かないほどのところに錨を下ろして、同行者たちをすべて船に残したまま、一人で上陸する。上陸した国の主馬頭と交渉の結果、トリスタンはアイルランド王に毎月純金一マルクを支払い、主馬頭には金盃を与えることによって、その国に滞在することの許可を得たのである。

2. 竜退治

いずれにしてもアイルランドに着いて、しばらくそこに滞在することになったトリストラント(トリスタンは)、その地で竜を退治することになるが、この竜退治のエピソードに関してはアイルハルトでもゴットフリートでもほぼ同じ展開を見せている。この部分はおそらくトリスタン伝説の原典(エストワール)が出来上がって以来、大幅に変更されることもなく語り継がれてきたのであろう。

ただ主人公が竜と戦うきっかけが両作品では異なっている。アイルハルトではトリストラントはひとまず生命は保証されたものの、この先どうすればよいかと途方に暮れているうち、一人の男から、一匹の竜がこの国を荒らしている、王はそれを退治した者には姫のイーザルデを褒美に差し出すと約束していることを聞き知る。トリストラントは竜退治を果たせば自分たちの生命がいつまでも保証されると思い、武器を身にまとい、馬に乗って、竜退治に出かけて行くのである。

これに対してゴットフリートではトリスタンはすでにコーンウォールを出発する前から、アイルランドは竜に苦しめられており、その竜を退治した者には娘イゾルデを妻に与えるという布令をアイルランド王が出していたことを知っていたのである。トリスタンが困難を伴う今回のアイルランドへの旅を引き受けたのも、実はその布令が出されていることを知っているのことであり、竜を退治する自信があったからである。このエピソードにおいて大きく異なるのはこの点である。

このように竜退治は最初からトリスタンが期待していた冒険であったということがゴットフリートの特徴であるが、そのあと竜を退治して、その舌を切り取ったトリストラント(トリスタンは)が意識を失って倒れ、その手柄をその国の内膳頭——アイルランド王女に恋心を抱いていた——が横取りしようとする企み、竜の頭を切り取って、国王に褒美として王女を妻に要求することとなる展開は、アイルハルトとゴットフリートでは、多少の相違はあれ、ほぼ同じであると言ってよいであろう。

3. 剣の刃こぼれ

ただその内膳頭の話信じることができず、その嘘を暴(あば)くため王女たちが竜退治の現場に出かけて、そこで気絶して倒れているトリストラント(トリスタン)を見つけて、館に連れ帰って介護したり、身の回りの世話をしているうち彼の剣に「刃こぼれ」があるのを発見する場面になると、両作品の間では著しい違いを見せる展開となっている。

まずアイルハルトではイーザルデ姫と侍従ペレニース(Perenis)と侍女ブランゲーネ(Brangene)の三人が生氣を失った騎士を連れ帰り、イーザルデ姫が傷に効く香油を彼の身体に塗り、傷の手当てを施して、湯を使わせると、彼にはまた元どおり生氣と力が蘇ってきた。彼は自分の世話をしてくれているイーザルデの髪の毛を見て、まさにこの女性こそ探し求めていた髪の毛の持ち主であることを悟った。彼は自然にほほ笑むのを隠しきれなかった。そのほほ笑みに気づいた姫イーザルデは、彼の剣の手入れをせずにおいたので笑ったのだらうと解釈し、その剣を手にとって磨こうとした。そのとき彼女は剣に一箇所刃こぼれがあるのを目にとめ、以前にしまい込んでいた剣の破片を取り出してみると、その破片は剣の刃こぼれにぴったりと合った。そのことによってこの男が伯父モーロルトを殺した勇士であることを知るや否や、たちまち彼女の心にはこの男に対する敵意と憎悪が堰(せき)を切ったように溢れ出した。イーザルデ姫はトリストラントに伯父モーロルトを殺害した償いをしきりに要求するが、その姫の怒りを鎮めるのが侍女ブランゲーネである。ブランゲーネは、「この男に復讐しても、今の姫には得策でない。この男が死ねば、姫は内膳頭の妻とならなければならない」と言いながら、イーザルデを説き伏せると、彼女はトリストラントへの怒りを和らげ、彼の過去の行為をすっかり忘れて、しまいには彼の口に伸直りの口づけをする。さらにイーザルデは父王に向かって、竜を退治した真の勇者がかつていかなる所業をしておかしていたにしても、それを赦してやってほしいと頼む。すると父王もまたそれを約束したのであった。

これに対してゴットフリートではイゾルデ姫は小姓パラニース(Paranis)と侍女ブランゲーネ(Brangene)のほかには王妃イゾルデとともに竜退治の現場に出かけて、そこで気絶している男を発見する。しかもそこで倒れている男の口に解毒剤を流し込んで、彼の意識を取り戻させるのは、王妃イゾルデではなく、王妃イゾルデである。そしてやがて王女イゾルデはその男が楽人タントリスであることに気づくのである。この竜退治の現場ですでに、その勇士がかつて王女の音楽教師を務めていた楽人タントリスであることが分かっている点でアイルハルトとは異なる。こうしてトリスタンは館に運ばれて、この国にやって来たわけを尋ねられると、「略奪者に襲われてアイルランドにやって来た」と作り話をしてから、この国での滞在が得られるものと思つて、竜を退治したことを話すとともに、内膳頭と闘う意志のあることを伝えた。すると王妃イゾルデもトリスタンを全面的に保護する約束を

した。こうして内膳頭と決闘することになったので、王女イゾルデが小姓バラニースに勇士の甲冑と武器を磨かせたとき、その剣に刃こぼれがあるのを見つけ、それがモーロルトの頭蓋骨に残っていた剣の破片と一致したので、楽人タントリスが紛れもなくモーロルトを殺したトリスタンであることが判明したのである。王女イゾルデは復讐の念に駆られて、トリスタンが入浴しているところを襲うが、そこへ王妃イゾルデが入って来て、それを制止する。王妃も真相を知ると、昔のことを思い出してトリスタンに怒りを覚えるが、一度全面的に彼の保護を引き受けたからには復讐することはできずに、思いとどまるよう王女イゾルデを説得する。王女イゾルデの方も仇敵を目の前にしながら、どうしても彼を討つことはできなかった。この場面で詩人が明らかにしているように、「優しい女らしさが彼女の身に具わっていて、そうするのを引き止めた」からである。ついに「優しい女らしさが怒りに打ち勝って」、王女イゾルデはトリスタンを討ち果たすことはできなかった。さらにそこへ侍女ブランゲーネが介入して、そのとりなしと助言によって、彼と彼女たちとの間ですっかり和解が整い、成立したのである。アイルハルトとはまったく違った展開となっていることが理解できよう。

4. イーザルデをマルケ王の妃に所望するトリストラント

この和解のあとに展開されるのは、内膳頭の嘘を暴く裁判のエピソードと、もう一つは王女イーザルデ(イゾルデ)を妻に迎えたいというマルケ王の意向をアイルランド側に伝えるエピソードであるが、これらのエピソードはアイルハルトとゴットフリートでは挿入される箇所が異なっている。

アイルハルトでは、すなわち、竜退治の真の勇者を証明する裁判の日がくると、アイルランド王の重臣たちが居並ぶ中に、トリストラントから連絡を受けた家来も船から降りてその場に加わった。アイルランド王が竜退治の真の勇者を連れて来るように伝えたと、イーザルデ姫はトリストラントを父王の御前へと導き、まず最初にこの勇士が伯父モーロルトを殺したことを打ち明ける。アイルランド王は一瞬顔を曇らせるものの、姫との約束どおり、トリストラントのかつての所業を赦した。そのあとでイーザルデ姫は、このトリストラントこそが竜退治を見事に果たした勇者であることを打ち明けた。すると内膳頭が立ち上がって異議を唱えるが、トリストラントが決闘を申し出るとともに、竜の舌を証拠に持ち出すと、内膳頭は決闘をあきらめ、自らその悪事を残らず白状してから、馬に乗ってその国を立ち去って行く。こうして内膳頭の嘘を暴いたのちに、初めてトリストラントはアイルランド王にマルケ王の求婚話を持ち出すのである。この求婚話に対してアイルランド王は「トリストラントはモーロルトを殺したことで姫に大きな悲しみを負わせているので、いつか姫がそれを思い出すことでもあれば、二人は一緒に楽しく暮らせまい」と考え

て、トリストラントの提案を承諾するのである。

ところが、ゴットフリートにおいてはそのマルケ王の求婚の話は、竜退治の真の勇者を決める裁判が行われる前、しかもトリスタンとイゾルデ姫が和解した場面ですでにトリスタンによって伝えられている。それを聞いたアイルランド王は、ただちにこれに同意するが、それは何事も平穩に収めようとする王妃の口添えがあったことも加わって、この婚姻によって長年アイルランドとコーンウォールとの間に繰り広げられてきた争いも解決されると考えたからである。ゴットフリートではことごとく王妃イゾルデがあらすじの展開に関わって、重要な役割を果たしていることが明らかである。そのあと竜退治の真の勇者をめぐる裁判が行われ、竜の頭を証拠とする内膳頭に対してトリスタンは竜の舌を持ち出すことによって相手の嘘を暴くことになるのは、アイルハルトの場合と同じである。しかし、そのほかの点では両作品は多少の違いを見せていることが容易に理解できよう。

5. 愛の秘薬

こうしてアイルランド王女イーザルデ(イゾルデ)はマルケ王の花嫁としてコーンウォールに向けて旅立つことになるが、この婚礼の船旅のさまはアイルハルトとゴットフリートでは多少の違いを見せながら展開していく。

王女がマルケ王のもとに嫁いで行くにあたって、母后が調査して、新郎新婦が初夜の寝床についたとき二人にそれを飲ませるようにと侍女ブランゲーネに託した愛の秘薬に関しても、両作品の間に違いが見られる。すなわち、アイルハルトでは、それを一緒に飲んだ男女は、一日たりと離れて暮らすことはできず、一週間も互いに言葉を交わさずに会わないで過ごせば、たちまちどちらも病にかかって死んでしまうという秘薬であったが、その効き目には四年間という期限が付けられている。これに対してゴットフリートでは確かに「これをどんな人でも一緒に飲めば、その人を心ならずも何物にもまして愛さずにはおれず、相手もまたその人のみを愛するようになって、この二人には一つの死と一つの生、一つの悲しみと一つの喜びが、共有のものとして与えられる」(石川敬三訳)とされているが、しかし、その効き目にアイルハルトのような期限は付けられていない。この点は大きな相違点であると言える。

また船が出航してトリストラント(トリスタン)は、あれこれとイーザルデ(イゾルデ)に殊のほか心を配って世話をするが、特にゴットフリートではイゾルデは伯父モーロルトの死を思い出して、トリスタンの親切を拒み続けることになっている。その点でもゴットフリートではアイルハルトと多少の違いを見せている。

さらにそのあと恋人たちが誤って愛の秘薬を飲んでしまう場面においても、多少の相違が認められる。航海の途中で船を陸に着けて、休息を取るようになるのも、アイルハルト

では慣れない船旅でイーザルデが気分を悪くしたためであるが、ゴットフリートでは船旅に慣れない婦人たちのためとなっている。いずれにしてもイーザルデ(イゾルデ)は上陸せずに、船の中の部屋に残るが、そこへトリストラント(トリスタン)がやって来て、何か飲み物が欲しいと求める。すると一人の侍女がワインだと思って、飲み物を持って来たが、それは例の愛の秘薬であった。最初トリストラント(トリスタン)が飲むと、とてもおいしかったので、イーザルデ(イゾルデ)にも勧めた。それを飲んだ二人の心にはたちまち変化が現れた。

その二人の心に変化が現れて、恋の喜びと苦しみのち二人が愛で結ばれる場面は、両作品ではそれぞれ特有の表現となっている。まずアイルハルトでは二人がそれを飲み干すや、二人はなぜとも分からぬままに、たちまち顔が赤くなったり、青くなったりした。兩人とも相手のために死ぬのではないかと思うほど、二人の間に愛しいと思う心が高まっていった。二人は心の変化に驚きながらも、それを他人に打ち明けることを恐れた。この場面でイーザルデは実に二百行にもわたって長々と恋の喜びと同時に苦しみを告白する。彼女は突然自分の心の中に起こった変化を「ミンネ」のせいにするのであるが、この「ミンネの讃歌」はアイルハルト独自の特徴⁹⁾と言ってもよいであろう。彼女の長い告白のあと、トリストラントの心の状態については、ごく簡単に「彼もまた同じ感情の囚われ人になっていた。気高い姫のことを、夜となく昼となく、思い続けて、それ以外のことは何もしなかった」と片付けているが、トリストラントも彼女と同じ気持ちであったことがそれで十分明らかとされていると言える。このように二人はともにひどく苦しみ、三日半の間、一切の飲み物を拒んで、ただ臥してばかりいたのである。この二人の苦しみに気づいたのが侍女ブランゲーネと侍従クルネヴァールであった。特にブランゲーネは愛の秘薬がなくなっているのに気づき、二人の病状がその秘薬のせいであることを悟ると、二人を愛で結びつけようと、クルネヴァールに手助けを頼んだ。ちょうどその頃、船が再びとある港に停泊することになった。トリストラントとイーザルデが愛の秘薬を飲んでから四日目のことであつた。一行の者たちがほとんど陸に上がって、船内が静かになったとき、クルネヴァールはトリストラントのところに行って、言葉巧みにイーザルデ姫を見舞うように勧めた。トリストラントは姫の船室に入ると、姫の傍らに歩み寄り、姫のそばに腰を下ろした。このさまを目にしたクルネヴァールとブランゲーネは、すばやく恋人たちの邪魔にならぬよう、そっと部屋から出て行った。その部屋の中にはトリストラントとイーザルデのほかには、もはや「ミンネ」だけしかいなくなった。二人はやがて健康を取り戻し、愛の喜びを

⁹⁾ 佐藤輝夫：前掲書 281-292 ページ参照。

心ゆくまで味わったのであった。このあたりではアイルハルトらしい表現が見られる。

一方、ゴットフリートではどうか。二人が媚薬を飲んだところへ、侍女ブランゲーネが現れ、驚きのあまり顔色を失う。媚薬を飲んだ二人の心には激しい恋の炎が燃え上がる。ゴットフリートではイゾルデはトリスタンの親切を拒み、彼に憎しみを抱いていただけに、愛の媚薬を飲んだのちの二人の愛はそれだけいっそう激しく燃え上がるのである。聡明なブランゲーネは二人がその恋の苦しみに悶え苦しんでいるのに気づいて、二人に物思いの原因を尋ねると、トリスタンはイゾルデに恋していることを告白する。そのときゴットフリートの特徴として、トリスタンはブランゲーネが自分たちの恋の邪魔になると非難している。ゴットフリートではブランゲーネが自ら進んで苦しむ二人を愛で結ばせようとするのではなく、逆に二人がブランゲーネを邪魔者扱いして、彼女を遠ざけるのである。ブランゲーネはこの秘め事を他人に漏らさないように忠告してから、恋人たちを二人きりにしている。このあと二人が愛で結ばれる場面でも、ゴットフリートでは彼特有の「医者である愛の女神」という擬人化を用いて、その「愛の女神」が二人の身体と心を結び付けたと表現している。媚薬の効き目に四年間という期限を設けたアイルハルトにおいてよりも、ゴットフリートでは「愛」というものにより強い意味を込めていると言うことができよう。

こうして両作品ともに二人の愛の歓びはしばらくの間続き、とうとうマルケ王の国が目の前に見える辺りまで船がやって来ると、イーザルデ(イゾルデ)は侍女ブランゲーネに初夜を迎える際には、国王と寝床を共にしてくれるようにと懇願する。これに対してブランゲーネは、わが身の誇りと名誉のために最初のうちはそれを拒むが、しかし、秘薬の保管に関して自分の責任を感じて、最後には嫌々ながらもそれを承諾するのである。この場面はアイルハルトとゴットフリートではほぼ同じ展開である。

6. マルケ王とイーザルデの婚礼

さて、船がコーンウォールに着くと、アイルハルトではマルケ王はイーザルデ(イゾルデ)姫を出迎え、宮殿でただちに盛大な結婚式が執り行われた。そのときトリストラントはマルケ王に向かって、婚姻の夜の儀式は妃イーザルデのために是非ともアイルランドの慣習によって執り行われることを懇願することになっている。その習慣とは、「花嫁の姿が翌朝起きるときまで誰の目にも見られないようにするため、初夜には室内の灯りをすべて消してほしい」というものである。マルケ王はそれを承諾するとともに、トリストラントを侍従に任じた。こうしてトリストラントは室内の灯りをすべて消すと、ブランゲーネをマルケ王の寝所に導いた。その夜、イーザルデはトリストラントのそばで寝ていたが、真夜中になってからブランゲーネと入れ替わったのである。作者アイルハルトはここで「これが最も大きな欺瞞であった」と語っているが、しかし、そのあと「この欺瞞にまでトリスト

ラントを導いたものは、例の愛の秘薬であって、彼は自分の意志に反してそうしたのだから、それは彼の国王に対する反逆行為ではなかった」と弁護している。このとき以来、トリストラントは宮廷にあって、誰にも気づかれることなく、妃イーザルデと毎日のように逢瀬を重ねて、約一か年の歳月を過ごしたのであった。

これに対してゴットフリートでは結婚式は十八日後に執り行われるが、その初夜の場面ではアイルハルトに見られるようなアイルランドでの初夜の慣習は取り入れられておらず、その代りに王妃イゾルデと侍女ブランゲーネが衣装を取り替え、王妃イゾルデが灯りを消して、侍女ブランゲーネがマルケ王の寝床に入って愛撫を受けることになっている。その二人が寝床の中で愛の戯れをしている間中、ゴットフリートの特徴的なこととして、王妃イゾルデは二人の愛の戯れが長く続いて、そのまま夜を明かしてしまうのではないかと心配しているが、幸いにも、ブランゲーネは自分の役目を果たし終えると、そっと寝床から出て来た。そこでマルケ王は、初花を摘み取ったときには当時一般に行われていたという風習に従って、ワインを運ばせ、それをブランゲーネと入れ替わった王妃イゾルデと一緒に飲んだ。そのあと王妃イゾルデは苦しい思いをしながらもマルケ王のそばに初めて身を横たえた。マルケ王は再びそばにいる女性を抱きしめたが、王妃イゾルデと侍女ブランゲーネが仕組んだ初夜の欺瞞には少しも気がつかなかったのである。

7. 侍女ブランゲーネの忠誠

ところが、やがて王妃イーザルデ(イゾルデ)は侍女ブランゲーネが自分のことをマルケ王に話すのではないかと恐れ始める。この展開は両作品において、多少の差こそあれ、おおむね同じである。

アイルハルトに従って、その場面の展開を辿っていくと、妃イーザルデは二人の貧しい騎士を呼び寄せて、銀六十マルクを与え、泉のほとりに身を潜めて、そこへ水汲みに来る者の命を奪い、その証拠に肝臓を取り出して持ち帰ってほしいと依頼する一方、侍女ブランゲーネには果樹園の泉から水を汲んで来てくれるように頼んだ。忠実なブランゲーネは泉へ出かけて水を汲もうとしたところ、二人の男が現れて、殺されかけた。そこでブランゲーネは、自分に思いあたる罪と言えば、「イーザルデ様がアイルランドよりこの国にやって来たとき、一晩だけ自分の下着を妃に貸したことだけなので、命を助けてほしい」と願い出た。二人の男は彼女の言葉にあわれみを感じて、ちょうどそこに通りかかった犬の肝臓を取り出して、それを王妃のもとに届けた。報告を聞いた妃は、ブランゲーネが何か言わなかったか、と尋ねると、男は下着の話の聞いたと答えた。そのほかには何も言わなかったか、となおも聞かれて、男がそのほかには何も口にしなかったと答えると、妃はブランゲーネが今なお自分に対して心からの忠誠を抱いていることを悟り、突然心を取り乱

して、わが身を責め始めた。それを見た男は、本当のことを打ち明けて、ブランゲーネがまだ生きていることを伝えた。すると王妃はただちにブランゲーネを連れ戻すようにと頼んだ。やがてブランゲーネが戻って来て、妃が侍女に自らの罪の許しを乞うと、ブランゲーネもこれに答えていっそうの忠誠を誓ったのであった。このときトリストラントはマルケ王とともに狩りに出かけていたが、戻って来てこのことをクルネヴァールから聞き知ると、イーザルデをたしなめてから、ますますいっそうブランゲーネに目をかけてやるようにと願うのであった。

これに対してゴットフリートでは王妃イゾルデが侍女ブランゲーネの殺害を頼むのは、二人の小姓に対してであり、しかもその証拠には侍女の肝臓ではなく、舌を切り取ってくるようにと命じるのであり、その点で違いを見せているが、その他の点ではほぼアイルハルトと同じ展開である。

第三章 恋人たちの逢瀬

1. 宮廷内の密告者

こうしてイゾルデはマルケ王の妃としてコーンウォールの宮廷で暮らすとともに、トリストラント（トリスタン）もマルケ王の甥として同じ宮廷内にとどまることとなって、二人は密かに逢瀬を重ねているうち、二人の関係を密告する者が出てくるエピソードへと繋がっていくのであるが、ただゴットフリートではその前にアイルランドのガンディーン（Gandîn）という名の貴族によってイゾルデがあやうく連れ去られそうになったところをトリスタンが救出するというエピソード（「ロッセとハーブ」）が挿入されている。これはアイルハルトには見出されないエピソードである。そのあとの宮廷内での密告者たちのエピソードについても、アイルハルトの作品とゴットフリートの作品では大筋ではほぼ同じであっても、細かな点では多少の違いを見せている。

まずアイルハルトではマルケ王に愛されているトリストラントに嫉妬を覚えて、彼を敵視していたのは、三人の大公と四人の伯爵である。その首謀者がマルケ王のもう一人の甥アントレート（Andréd, Antret）であり、ある日、彼らはマルケ王に、トリストラントが王妃を愛して、国王の名誉をひどく傷つけていると告発したのである。マルケ王は自分の名誉もトリストラントのおかげであると言って、アントレート一派の誹謗（ひぼう）を受け付けないうころか、「わしの生きている限り、わしの生命も財産も、彼（トリストラント）と共有するつもりだ」とまでも言い切るのである。アントレート一派もトリストラントと妃との関係を確認しているわけではなかったので、彼らは監視を続けたり、作り話をこしらえてマルケ王に吹聴したりしたが、国王はもちろんそれを受け付けなかった。ところが、ある夜、そのアントレート一派の密告を無視して寝所に行こうとしたとき、マルケ王はト

レストランが自分の寢床の前で王妃を抱擁して、熱い口づけをしているのを目にした。マルケ王は激怒して、トリストラントを「不忠の家臣」と罵り、ただちにこの宮廷から出て行くようにと命じた。追放されたトリストラントは、ひとまず城下の宿に身を落ち着けるが、王妃イーザルデに会えない苦しみはたとえようもなかった。王妃イーザルデとても同じであった。一体どうすればよいのか。この二人の苦しみを和らげることのできるのは、ブランゲーネをおいてほかには誰もいなかった。王妃の願いを聞いたブランゲーネは、さっそくトリストラントの宿を訪れて、王妃の様子を伝えて、会う手立てを考え出してほしいと言った。するとトリストラントは、王妃の部屋を貫いて流れている小川に十字の印をつけた木片を流すので、それを見たら、菩提樹の下にいる証拠だから、そこへ来てほしいと伝えさせた。この方法で二人の恋人たちはまたもやこれから先も逢瀬を繰り返すのである。

これに対してゴットフリートでは二人の恋人たちのことをマルケ王に密告するのは、マリョドー(Marjodó)という名の内膳頭一人だけであり、しかも彼はトリスタンの友人で、住居をともにしている人物で、彼もまた王妃イゾルデに密かに思慕の情を寄せていることになっている。ある夜、内膳頭マリョドーはこっそりと抜け出したトリスタンのあとをつけて行って、トリスタンが王妃イゾルデの部屋にいることを突き止めて、二人の秘密を盗み聞きしたときから、二人に憎悪を抱くようになり、マルケ王に密告するのである。マルケ王は事の真相を知るために、内膳頭マリョドーの策略に従ってあれこれと試してみるが、しかし、王妃イゾルデは侍女ブランゲーネの助言によって巧みにマルケ王の猜疑心を取り除くのであり、このような王妃と国王の知恵比べが繰り返されている。内膳頭マリョドーは自分の思いどおりにならないことが分かると、今度はメロート(Melôt)という名の小人——星の動きを見て秘密を知ることができるという能力を有している——を使って、トリスタンとイゾルデの様子を探らせて、二人の恋を確信すると、マルケ王に密告するのである。マルケ王はトリスタンに婦人部屋に近づかないように命じるが、離れていることの苦しみを隠すことのできない恋人たちは、ブランゲーネの助言に従って、婦人部屋のそばを流れる小川にTとIの文字を書き込んだ板切れを流して、それを合図として、泉のほとりのオリーブの木陰でまたもや逢瀬を重ねていくのである。

2. 菩提樹の下(オリーブの木陰)での逢瀬

このあたりの二人の逢瀬については、細かな相違はあるものの、恋人たちとマルケ王の知恵比べという大筋においては、アイルハルトとゴットフリートとではほぼ同じである。

ゴットフリートにおいてと同じように、アイルハルトでも星の動きから秘密を探り出すことのできる小人が登場するが、ただその小人の名前はメロートではなく、アキタイン

(Aquitain)¹⁰⁾とされている。マルケ王はこの小人から二人が菩提樹の下で逢引きを重ねていることを聞き知って、その菩提樹の上に登って、その密会の現場を取り押さえようとするのである。イーザルデはいつものようにトリストラントから逢引きの合図（小川の流れの中の木片）を見て、恋人の待つ泉のほとりへと急ぐが、そのときトリストラントの態度がいつもと違うことから警戒しているうちに、菩提樹の上からマルケ王が見張っていることに気づいた。すると彼女はとっさに機転を利かせて、「なぜこんな時刻に私を呼び出したのか」とトリストラントを責める振りをして、見張っているマルケ王に対して先手を打つのである。この場面ではイーザルデの方がイニシアティブをとってトリストラントとの会話を進めて、巧みにマルケ王の裏を搔くのである。このような二人の会話の一部始終を盗み聞きしたマルケ王は、翌日、王妃イーザルデに問い質（ただ）したところ、彼女は正直に昨夜の会話の内容をそのまま打ち明けたので、自分が裏を搔かれているとも知らずに、二人の潔白を信じ、小人を叱責して追放するとともに、トリストラントにはまた宮廷への出入りを許すことになるのである。

これに対してゴットフリートではオリーブの木の上に登るのは、マルケ王と小人メロートの二人となっていることや、恋人たちがマルケ王の裏を搔くために話す内容が若干異なっていること、そしてマルケ王が翌日王妃イゾルデに問い質す場面がないということのほかは、アイルハルトとほぼ同じ展開である。

3. 小麦粉を使つての罠にかかるトリストラント

こうしてトリストラント（トリスタン）は再び宮廷への出入りを許されたのであるが、またもや彼に妬みを抱く宮廷内の邪悪な者たちによって罠に陥れられて、処刑されることになるものの、二人の恋人はその処刑をうまく免れることになるというエピソードが続いている。このエピソードでもアイルハルトとゴットフリートでは著しい違いが見られる。

まずアイルハルトではマルケ王の叱責を受けて追放されていた小人アキタインは、内膳頭ティーナスによって偶然森の中で見つけられて、マルケ王のもとに連れ戻されることになっている。トリストラントを妬むアントレート一派は、この小人の知恵を借りて、まずはトリストラントを七日間の旅に出させることにする。するとトリストラントはその旅立ちの前に必ず王妃イーザルデの寝床を訪れるので、そのとき小人の入れ知恵でその寝床の周辺に小麦粉を撒き散らしておいて、王妃イーザルデの寝床を訪れるトリストラントを罠

¹⁰⁾ ただし、この小人は3931行目にアキタインと名前をつけられているものの、そのほかではたいてい名前なしで登場している。ちなみに、ゴットフリートの作品ではアキターン(Aquitain)はメロートの出身地とされている。石川敬三訳：前掲書244ページ参照。

に仕掛けようと謀ったのである。トリストラントはこの邪悪な者たちの策略にはめられてしまい、真夜中にイーザルデの寝床へ行く際には飛び越えたものの、マルケ王の足音を聞きつけて、慌てて自分の寝台に戻ろうとしたとき、飛び越えたはずみに、前日の狩りで痛めていた脚の傷口から血が流れ出し、それが動かぬ証拠となって、トリストラントは車裂きの刑を宣告され、またイーザルデは火炙りの刑を宣告されることになるのである。そこでまずはトリストラントが処刑場に連れて行かれる途中、礼拝堂の前を通りかかったとき、彼はその中で祈りを捧げたいと願い出て、その礼拝堂に入ることを許されると、その礼拝堂の窓から海に向かって跳び降りて、なんとかうまく逃げ去ることに成功する。トリストラントの逃亡を伝え聞いて怒ったマルケ王は、ただちに王妃イーザルデを火炙りの刑に処すよう命じるが、王妃イーザルデも処刑場に向かう途中で癩病患者たちに出会い、火炙りの刑に処せられるよりも極刑にあたると思われて、その癩病患者の手に引き渡されることになるものの、やがてトリストラントと従者クルネヴァールによって救い出されるのである。

これに対してゴットフリートでは内膳頭マリョドーが小人メロートの入れ知恵によって小麦粉を使つての罠を仕掛けるのは、マルケ王が早朝のミサに出かけた際に、トリスタンが王妃イゾルデを訪れるときとなっている。しかもトリスタンは血を流してしまうものの、王妃イゾルデとともに巧みな言葉でもって言い逃れており、その疑念を晴らすために王妃イゾルデは熱鉄の裁きを受けることになっている。その熱鉄の裁きの場で王妃イゾルデは、巡礼者に変装したトリスタンに船から岸まで運んでもらい、その際、巡礼者は転倒して王妃を抱いたまま臥す格好となった。そこで王妃は、そののち行われた裁判の折りに皆の前で、その巡礼者を除けば夫以外の誰も自分の脇に臥せった者はないと誓った。これには嘘偽りがなかったので、王妃イゾルデはその場で熱鉄を掴んでも、少しも火傷(やけど)をせずに済んだのである。これにより王妃は無実を証明し、マルケ王の疑念を取り除いたのである。このあとゴットフリートではさらにユニークな小犬プティックリュー(Petiteriu)のエピソードが続いていることを考えると、このあたりに関してはゴットフリートにおいてはアルイハルトにはないエピソードが織り込まれて、新たな展開となっていることが容易に理解できよう。いずれにしても熱鉄の裁きによって王妃イゾルデの無実が証明されたので、トリスタンは再び宮廷に呼び戻されることになったが、しかし、恋する二人が秘密をひた隠しに隠しても、猜疑の種は尽きず、またもやマルケ王の胸には疑惑が生じてきた。彼は妻イゾルデが自分以上にトリスタンを愛していることを信じて疑わず、その悩みと怒りに正気と節度を失ってしまい、二人を呼び寄せて、自分の気持ちを明らかにする。彼は二人に復讐しようとは思わないが、二人が与える苦悩と恥辱をこれ以上一緒に担い続けようとは思わないと言って、二人にこの宮廷から立ち去るようにと命じるのである。このあ

とゴットフリートでもアイルハルトと同じように二人は森の中で生活することになるのであるが、その経緯が両者では著しく異なっていることが明らかである。

4. 森の中の生活

こうして恋人たちは従者とともにマルケ王の宮廷から少し離れたところにある森の中に逃げ延びて、そこで生活することになるが、この森の中の生活はアイルハルトにおいても、またゴットフリートにおいてもなくてはならない重要なエピソードである。しかし、両者ではかなりの相違が認められる。

まずアイルハルトではトリストラントとイーザルデが侍従クルネヴァールとともに一緒に暮らしているところへ、のちにトリストラントの愛犬ウータント(Utant)がやって来るエピソードが取り入れられているが、ゴットフリートではそのようなエピソードはない。いずれにしても恋人たちはこの森の中で艱難辛苦の生活を送り迎えたのであったが、二人の愛がその辛苦の生活を甘美なものに変えてくれたのである。この点では両作品に違いはない。

しかし、やがてこうして森の中で暮らす二人の運命を変える日がやってきた。アイルハルトではマルケ王の森番が、ゴットフリートではマルケ王の獵人頭が恋人たちの小屋を見つけ、主人のマルケ王に知らせたのである。森番あるいは獵人頭が二人を見つけた場面と、その知らせを受けてマルケ王が駆けつけて来た場面について、両作品を比較してみよう。

まずアイルハルトでは森番に見つけられたとき、トリストラントとイーザルデとの間には抜き身の剣が置かれてあったが、この作品では抜き身の剣を二人の間に置くのは習慣であったと語られている。これに対してゴットフリートでは、トリスタンはマルケ王が愛の洞窟のあたりで狩りをしているのを知っていて、狩りの一行のうちの誰かがこのあたりに現れて自分たちの秘密に気づくかもしれないことを恐れて、万一の場合に備えて一案を思いつき、互いによそよそしく離れて横になった上で、さらに抜き身の剣を二人の間に置いていたのである。

いずれにしても知らせを受けたマルケ王は、そこに駆けつけてみると、二人が抜き身の剣を間に置いて眠っているのを見た。すると国王は、アイルハルトでは、その剣を取り上げ、その代わりに自分の剣を置き、王妃の身体の上には自分の手袋を置くほか、王妃の指に嵌まっていた指輪までも自分のものと取り替えてから帰って行くことになっている。これに対してゴットフリートでは、マルケ王はただ陽光が王妃の美しい皮膚を損わないように、小窓を草や葉で塞いで立ち去るだけとなっている。

二人が目覚めた場面についても、両作品では相違が見られる。アイルハルトではマルケ

王がこの場にやって来たことを知ると、二人は慌ててクルネヴァールを伴ってその小屋を立ち去り、その途中で隠者ウーグリーム(Ugrim)の庵に辿り着くが、そのときにはまだ懺悔は受け入れられなかった。これに対してゴットフリートでは目覚めたとき二人は、マルケ王がここへやって来たことを憶測するのみで、確証はなかったが、誰かに眠っているところを見られたにせよ、二人が互いに背を向け合って横たわっていたことをせめてもの慰めだと思っただけである。

その後、イーザルデ(イゾルデ)がマルケ王のもとに戻るようになるのも、アイルハルトとゴットフリートとは著しい違いを見せている。アイルハルトではそのきっかけは、あの秘薬の効き目が切れてしまう四年目の日がやって来たことである。その効き目が切れた日を境に、二人はこれ以上森で不自由な生活をするには耐えられないという気持ちも強まって、再び隠者の庵を訪ねて、そのとりなしでイーザルデを国王のもとに返すことになる一方、トリストラントは追放の身となるのである。その際、トリストラントは一匹の犬を大切にしてほしいと願いながら、それをイーザルデに渡してそこを立ち去って行くのである。

これに対してゴットフリートでは、王妃イゾルデがマルケ王のもとに戻るようになるのは、二人の間には抜き身の剣が置かれていたことから、マルケ王が二人の潔白を信じたことに基づいている。そこでマルケ王は顧問官や親戚の者たちと相談して、以前より宮廷に戻っていたクルヴェナル(クルネヴァール)を二人のもとに遣わせて、二人を連れ戻すのである。従って、ゴットフリートでは隠者は登場しないし、トリスタンの懺悔のエピソードなども取り入れられていない。トリスタンもこの時点ではまだ追放されておらず、ひとまず宮廷に戻ることが許されている。そのためゴットフリートではその後の宮廷での話が續いている。元どおりの生活が始まったが、しかし、マルケ王の嫉妬と猜疑は容易には消えず、ある暑い昼下がりにイゾルデが庭の木陰に寝床を用意させて、そこにトリスタンを呼び寄せたところをマルケ王がついに見つけたのである。それによってトリスタンは宮廷から追放されることになる。別れにあたってイゾルデは、トリスタンに指輪を贈ると、トリスタンはそこを立ち去り、各地で武勲を立てながらも、イゾルデに会えないという悲嘆の日々を送り迎えるのである。

一方、王妃イーザルデが森からマルケ王のもとに戻って来た時点で追放の身となっていたアイルハルトでのトリストラントは、その後、ブリタニアのアルトゥース王の宮廷に向かうことになっている。そこで盛大な歓迎を受けて、ヴァルヴァーン(Walwân)という宮廷騎士とよき友になった話や、デレコルス(Delekors)という騎士と闘った話のほか、親友ヴァルヴァーンの提案でアルトゥース王が狩りを催すことになり、その狩りをした夜、アルトゥース王の一行がマルケ王の居城に宿泊することになった話が展開されている。もちろ

んその狩りにトリストラントも同行しており、宿泊客を出迎えたマルケ王は、歓迎の宴が終わると、客人たちに向かって、今宵はゆっくりと休んでいただきたいが、自分に恥辱を与えるような振る舞いだけは慎んでほしいと言ひ渡した。これはトリストラントへの警告にほかならなかった。さらにマルケ王は、トリストラントが妃に夜這いをかけるようなことがあった場合に彼を捕らえる方策として、狼用の罾を広間に仕掛けておいた。トリストラントは、人々が寝静まってから、妃のもとへ忍んで行く途中、その罾にかかかって深手を負ひ、多くの血を流してしまった。それでも彼は、下着を裂いて傷を縛つてから、妃の寝床に忍び込んで、妃と抱擁を交わしたが、やがて我に返ると、血が証拠となってマルケ王の怒りに触れて命を取られることになるだろうと嘆いた。この嘆き声を耳にして、一部始終を知った親友ヴァルヴァーンは、仲間を皆起こして、一緒に騒ぎ合い、罵り合いながら、互いを罾の方に投げ跳ばし合うように仕向けた。大勢が傷ついてもまれば、トリストラントを救うことができると考えたのである。この策に従って皆は、故意に痛手を受けようと、互いに罾に向かって投げ跳ばし合ったが、騎士ケイエ(Keie)だけは狡賢くて、騒ぎに加わりとうしなかつた。これに気づいたヴァルヴァーンは彼を掴んで罾めがけて投げ飛ばすと、ケイエが一番の深手を負ってしまった。この騒ぎで目を覚ましたマルケ王は、怒ってこの馬鹿騒ぎを責めたが、アルトゥース王がいつものことだと言うと、マルケ王は怒りを鎮めて、ほかの人々もまた眠り込んでしまった。そのあとトリストラントはまた起き上がって、妃のもとへ忍び込んで行き、二人は朝まで一緒に同じ寝床で休んだのであった。このようなエピソードがアイルハルトにおいて織り込まれているのである。

このように見てくると、恋人たちの逢瀬をめぐる数々のエピソードに関しても、またマルケ王の宮廷から追放になったあとのエピソードに関しても、アイルハルトとゴットフリートの間にはかなりの相違があることが明白である。

第四章 白い手のイーザルデ(イゾルデ)

1. カラヘスの国を救うトリストラント

以上のとおり、トリストラント(トリスタン)がマルケ王の宮廷から追放されたあと、アイルハルトではトリストラントはアルトゥース王のもとへ行き、そこで独特なエピソードが挿入されているのに対して、ゴットフリートではトリスタンはその頃ドイツに大きな戦いがあるという噂を聞いて、シャンパーニュ経由でドイツへ行き、半年あまりすると、恋人の噂でも聞けはしないかと思って、ドイツを去り、再びノルマンディへ行って、そこから故郷パルメニーエに帰って来たが、以前お世話になった養父ルーアルもまたその夫人フロレーテもすでに亡き人となり、その息子たちのもとにとどまったことが淡淡と語られているに過ぎない。

両作品においてそのあとで展開されるのが、白い手のイーザルデ（イゾルデ）¹¹⁾と出会うこととなるエピソードである。このエピソードに関しては、大筋においては同じと考えてよいが、細かな点ではもちろん違いが認められる。

まずアイルハルトの作品でアルトゥース王の宮廷を立ち去ったトリストラントが、忠実な従者クルネヴァールとともに七日間旅を続けたのちに辿り着いたのは、荒れ果てたカラヘス(Karahes)という町であった。そこを治めていたのはハヴェリーン(Havelîn)王であったが、娘を嫁にもらうのを拒否されたことから反旗を翻したナンティスのリーオーレ(Riôle von Nantis)伯という家来によって城を攻められていたのである。ハヴェリーン王にはケヘニス(Kehenis)という息子がいて、その息子がわずかな部下とともにカラヘスの城に立て籠って苦戦していたのである。このことをミヒュール(Michêl)という司祭から聞き知ったトリストラントは、奉公することを申し出たところ、最初は食糧難を理由に断られたものの、ハヴェリーン王の息子ケヘニスの口添えで許可され、そこの城に入ることを許された。そこでトリストラントはケヘニスから妹を紹介されたのである。彼女の名前はイーザルデ(Isalde)とあったが、そのときトリストラントはケヘニスに「私はイーザルデを失い、イーザルデを見出した」と口にするが、「彼女より美しい女性を知っている」とは言わなかった。婦人部屋から出ると、ケヘニスはトリストラントに向かって、敵のリーオーレ伯が城下に迫って単騎決戦を挑んできているものの、味方にはそれに挑戦しようとする者がいないことを打ち明ける。それを聞いたトリストラントは、一人で城外に出てリーオーレ伯と闘い、彼を打ち破って、早急に一週間分の食糧を運び入れさせようえ、その身柄を城内にとどめておいた。この顛末(てんまつ)を耳にしたリーオーレ伯の部下たちが、主君の釈放を求めて攻撃を仕掛けてくるが、ハヴェリーン王側は二百人の軍勢を率いて馳せ参じた二人の甥の援助などもあったうえ、とりわけトリストラントとケヘニスの目立った働きにより、激戦の末、最後には勝利を収めた。リーオーレ伯はハヴェリーン王の望むとおりの協定を結んで降伏し、荒らした領土を元どおりに修復するというので、戦いは終結する。この両者間での戦いのさまがアイルハルトではかなり詳しく展開されており、しかも戦記物語に見られる戦闘の描写さながらの手法で表現されている¹²⁾。アイルハルトにはモーロルトとの決闘を除けば、これまでどこにも見られなかった特徴であり、それだけに注目すべき箇所の一つである。

これに対してゴットフリートではトリスタンが辿り着いたのは、ブルターニュとイング

11) アイルハルトでは「白い手の」という表現はされていないが、便宜上、「白い手のイーザルデ」と表示する。

12) 佐藤輝夫 前掲書 335-339 ページ参照。

ランドの間にある大公国アルンデール(Arundél)であった。その国を治めていたのは、大公ヨヴェリン(Jovelin)であり、その息子はカーエディーン(Kæedîn)といい、そのほかにも白い手のイゾルデという名の娘がいたのである。いずれにしてもその国は敵に襲われて、荒れ果てていた。トリスタンはその息子カーエディーンと固い友情を結んで、ともに敵と戦う。トリスタンはルーアルの息子たちにも援助を求めて、その国が勝利を収めることに貢献したのである。細かいところでアイルハルトとは相違があることが明らかである。

2. 白い手のイーザルデ（イゾルデ）との結婚

こうして戦いは両作品ともトリストラント（トリスタン）の功績によりそのケヘニス（アルンデール）の国の勝利に終わり、トリストラント（トリスタン）はその娘である白い手のイーザルデ（イゾルデ）と結婚することになるのであるが、そのきっかけと結婚後の生活については、両作品間では多少の違いがある。

まずアイルハルトではその国の息子ケヘニスはトリストラントがこの国を立ち去ってしまうのではないかと考えて、トリストラントに妹イーザルデとの結婚の話を持ちかけるのである。トリストラントは慎重に受け応えをしていたが、国王が進んで妻に与えてくれるならばということで承諾した。ケヘニスはさっそく父王に相談し、父王も賛同したので、トリストラントは白い手のイーザルデを娶ることになった。しかし、トリストラントは一年以上妻イーザルデとともに暮らしても、妻に指一本触れようとしなかった。妻イーザルデもこのように暮らすことに耐えていたが、この結婚生活のさまは、アイルハルトではあっさりとはほんの五行だけで片付けられている。

ところが、ある日、国王と王妃、トリストラントとイーザルデ、それにケヘニスの五人で遠乗りに出かけていた折りのこと、イーザルデの馬が水溜まりに踏み込んで、彼女の下着の下の膝まで水が跳ね上がり、彼女は何の気もなく、「水よ、なんと大胆なこと、どんな騎士の手さえこれまで届いていない、私の下着の下にまで跳び込んで来るとは」と、独り言を口にした。妹のことでわが家の名誉を傷つけられたと考えたケヘニスは、トリストラントに詰問するが、その場面がアイルハルトでは会話体で詳しく展開されている。そのトリストラントの打ち明け話からケヘニスは、彼が妹とまだ夫婦の契りを結んでいないことを知って、彼を責め立てた。するとトリストラントは、一人の女性が自分のために一匹の犬を可愛がってくれているが、その女性は彼の妹が私にするよりも、私の犬に対してもっと丁重に優しくしてくれることを打ち明けたあと、さらにこの言葉の偽りなきを実際に確かめるために彼をそこまで案内しようと言った。そこでトリストラントは再び妻のもとに戻ることを誓って、ケヘニスを案内して船でコーンウォールに向かうこととなったのである。

これに対してゴットフリートでは、その国の息子カーエディーンが援助者トリスタンに自分の妹である白い手のイゾルデとの結婚を持ちかけるのではなく、そこの白い手のイゾルデが気品高く聡明な上に、たいへん美しかったので、トリスタンはそのような彼女を目にしてアイルランドの王妃イゾルデを思い出して、悩み苦しむさまが長々と細かに書かれている。その心の葛藤が細かに書かれているところにゴットフリートの特徴があると言えるが、しかし、まさにその場面でゴットフリートの作品は中断している。おそらくは作者ゴットフリートの死のために中断してしまったと推定されている。

幸いにも、そのあと展開されるはずであったであろう物語が、ゴットフリートとともに同じトリスタン伝説の原典(エストワール)を用いたとされるフランスのトマの作品が遺されている。そこではトリスタンが悩み苦しんだ末に、白い手のイゾー(イゾルデ)と結婚するが、しかし、トリスタンと白い手のイゾーが形だけの夫婦生活を営んでいることが語られており、またそれがきっかけとなって「大胆な水」のエピソードも展開されている。このことを考慮すると、ゴットフリートにおいても同様の「大胆な水」のエピソードが展開され、それが主人公たちの王妃イゾルデ訪問のきっかけとなったのであろう。ゴットフリートの作品がその前の段階で中断してしまったのは、まことに残念である。ただそのあとの展開についてトマの作品と比較してみると、アイルハルトの作品と著しい違いを見せている。そこで以下では、ひととおりのアイルハルトにおけるその後のあらすじの展開を辿って、最後にトマの作品と比較して、アイルハルトとトマの作品の違いを指摘することにしよう。

3. ケヘニスとともにコーンウォールを訪れる

こうしてアイルハルトではトリストラントはケヘニスとともにコーンウォールへ出かけることになったが、そこに到着すると、トリストラントはまず内膳頭ティーンナスを訪れて、以前イーザルデが贈ってくれていた指輪を託して、彼に使者の役目を頼んで、王妃と会う手筈を整えてもらった。王妃はその使者からトリストラントの伝言を聞いて、さっそくマルケ王に翌日白木が原で狩りを催させて、豪華な行列を作って出かけて行った。その行列のさまがアイルハルトでは絢爛豪華に詳しく描写されている。トリストラントとケヘニスは茨の茂みに潜んでその華やかな行列が近づいて来るのを眺めていたが、その行列の輿(こし)の中に一匹の小犬がいて、それがトリストラントの犬で、彼のためにいつも王妃イーザルデが連れ歩いていることを知ると、ケヘニスはトリストラントに向かって「君自身だってあれほど大切に、私の妹からもてなされたことはないね」と囁(ささや)き、トリストラントの言葉に偽りのなかったことを認めたのであった。

やがて侍女たちに伴われて王妃がトリストラントとケヘニスの潜んでいる茨の茂みの前

まで来ると、トリストラントの合図に応えるかたちで、王妃は従者ガリーアゲ(Galiage)を呼び寄せて、それをマルケ王のもとに遣わせ、今夜は気分がすぐれないので、王の天幕は川向うに設け、自分の天幕はこちら側に設けるようにと伝えさせた。それから王妃は、そのとき茂みから聞こえてきた小鳥のさえずりに答えるような振りをして、今夜の自分の居場所をトリストラントにそれとなく教えたのであった。

夜になると、マルケ王が心配して王妃の天幕を訪れたが、王妃は気分が悪いと言って、彼を天幕の中に入れなかった。やがてトリストラントがケヘニスを伴って密かに王妃の天幕を訪れた。王妃はトリストラントを迎え入れた。その天幕の中にはイーザルデ、二人の侍女ブランゲーネとギメーレ(Gimêle, Gymêle)、そして従者ペレニースのほかには誰もいなかった。王妃はケヘニスの話し相手にブランゲーネかギメーレのいずれかを選ばせた。ケヘニスがギメーレを選んだところ、彼女は最初彼を田舎者扱いにして、その愛を退けたが、王妃の言い付けでひとまずそれを承知することにした。ギメーレの心情を察した王妃は、そこで彼女に魔法の枕を渡した。それを枕にしている間は、その者を眠らせるという不思議な力を持つ枕で、王妃はトリストラント恋しさのあまり眠れない夜はいつもそれを用いて悶える心を鎮めていたというものであった。その夜、ギメーレはその不思議な枕を用いて、ケヘニスを朝まで眠らせたままにしておいた。朝、目が覚めて、ケヘニスは悔しく思った。トリストラントの方は王妃イーザルデと多くの歓びを味わったのはもちろんのことである。

4. 王妃イーザルデの怒り

こうして王妃イーザルデとの逢瀬を果たしたトリストラントは、朝になって、狐につつまれたような苦い思いのケヘニスとともに、王妃の天幕を立ち去って行くが、間違った道を進んで、ある沼のところにやって来た。そこで侍従ペレニースを遣わせて、クルネヴァールともう一人の従者にこちらに馬を回してほしいと伝えさせた。クルネヴァールらがそこへ向かっているとき、ちょうどマルケ王の家来プレヘリーン(Pleherin)が七人の従者とともに通りかかり、クルネヴァールをトリストラントに違いないと考えて、声を張り上げて呼びかけたところ、彼らは振り向きもしないで逃げ出した。そこでプレヘリーンは「王妃の名誉にかけて戻ってほしい」と叫んだが、それでも彼らは逃げ去ってしまった。プレヘリーンは宮廷に帰って王妃にこのことを報告すると、王妃は激怒した。そこで王妃はプレヘリーンを遣わせて、その怒りをトリストラントに伝えさせると、トリストラントは逃げたのは自分ではないと答えた。そこへクルネヴァールらが三頭の馬を引いて現れて、昨夜のことで気がむしゃくしゃしていたケヘニスが、従者たちに自分の不平を述べたことから、トリストラントとケヘニスはあやうく喧嘩を始めるところであったが、トリストラント

トはケヘニスをここに連れて来たのも自分のためであったと思直して、怒りをじっとこらえ、プレヘリーンに対して王妃のもとに戻って自分の無実を伝えてほしいと頼んだ。しかし、やがてプレヘリーンからその伝言を聞いた王妃は、それを聞き入れないばかりではなく、トリストラントに賄賂(わいろ)をもらってそのように報告するのだろうと疑って、再度プレヘリーンをトリストラントのもとに遣わせて、その怒りを伝えさせた。それを聞いて悲しくなったトリストラントは、王妃のもとへ出かけることを考えて、クルネヴァールをその場から立ち去らせたうえ、ケヘニスにも好きな所へ行くがよいと言いつたが、ケヘニスはトリストラントが戻るまで待つと答えた。

5. 病人の装いで王妃を訪れる

トリストラントはそのあと一人の乞食から衣服を借り、鳴子を手にして、病人の装いで王妃の前に現れた。王妃はすぐにそれがトリストラントであることを見抜いたが、二度と自分の前に戻って来ないようにと、彼を追い払わせた。侍従に殴られて、追い返されているトリストラントを見て、王妃は大声をあげて笑った。トリストラントは悲しみと怒りに苛(さいな)まれながら、その場を去り、クルネヴァールのもとに帰ると、一部始終を話した。それを聞いたクルネヴァールは王妃に対して怒りと憎悪を覚え、これから一年間は王妃に会わないようにとトリストラントに進言した。トリストラントはそれを誓うとともに、ケヘニスに一時抱いていた怒りを鎮めた。ケヘニスも同様の気持ちだったので、二人は再び以前と変わらぬ友情を取り戻した。こうしてトリストラントは彼らとともにカラヘスの国へ帰ると、以前にも増して白い手のイーザルデに親しみ、優しい好意をかけるようになり、夫婦の契りを結んだのであった。王妃イーザルデに追い返されたために、トリストラントは白い手のイーザルデを妻として扱ったという筋立ては、アイルハルトに初めて取り入れられたもので、ユニークな特徴である。

一方、王妃イーザルデはトリストラントを嘲りながら追い返してしまったことを後悔し始め、深い悲嘆の底に沈み込んでいた。王妃は自分の過ちを素直に認めるまでになり、ピーロイゼ(Piloise)という小姓をカラヘスの国にいるトリストラントのもとへ遣わせて、王妃の償いの言葉とともに会いたいと思っていることを伝えたが、トリストラントは「心の傷は心臓の底まで深く残っている」と言って、それを拒んだ。このときのトリストラントと小姓の対話がアイルハルトでは長々と展開されている。その対話の中で小姓は繰り返し拒絶するトリストラントに対して、最後には「王妃の愛に免じて」とか、「あなたご自身の徳目のために」、さらには「あなたの善き慈悲心のために」と三度繰り返し懇願すると、トリストラントもついには王妃への怒りを和らげた。ただここ一年間は王妃に会わぬと誓いを立てているので、その期限が過ぎれば王妃を訪れることを約束して、小姓にその返事

を託した。その折りトリストラントはこの国の習慣に従って小姓にお金を贈った。小姓はそれを持ってサン・ミヒェル祭に出かけ、さまざまな品物を買ひ求めて、ティンタヨーエルに帰って行った。マルケ王はそれを見て小姓を訝(いぶか)ったが、小姓は賭博で勝ったのだとうまく言い逃れたので、王妃は安堵して嬉し泣きをしたことが付け加えられている。

6. 巡礼者の装いで王妃を訪れる

約束の一年の期限が切れる五月になると、トリストラントはさっそく巡礼者の装いでクルネヴァールと一緒に王妃の国へと出かけて行った。彼らはまずティーナスを訪れたが、不在だったので、以前潜んでいた茨の茂みに身を隠して信用できる者を待ち受けた。そこへちょうどティーナスが通りかかり、再会を喜び合ったあと、ティーナスに例の指輪を渡して、またもや王妃への使者の役目を頼んだ。ティーナスからトリストラントの伝言を受け取った王妃は、以前と同じように、マルケ王にもう一度白木が原で狩りを催すように懇願した。マルケ王は王妃の願いを受け入れて、狩りを催すことにした。

王妃はその頃、長年かしずいてくれた侍女ブランゲエネを亡くしていたので、このたびの狩りでは侍女ギメーレと一緒に連れて行くことにした。白木が原に着いたとき、王妃はマルケ王の指図で自分に従っている家臣のアントレートに巧みに用事を言い付けて、彼を立ち去らせたあとで、茂みに潜んでいるトリストラントとしばらくの間一緒に過ごすことができた。やがてアントレートが戻って来ると、王妃はやむなくそこを立ち去ったが、しかし、二人はその夜、安全な場所で出会い、幸せなひとときを過ごしたのであった。

朝になって、トリストラントは王妃と別れて、クルネヴァールを残してきた辺りを探したが見つからず、さまよっているうちに、宮廷の人々が競技をしているところに出くわした。そのとき一人の男がトリストラントに競技への参加を勧めたが、彼はそれを断った。するとその男は今度は「王妃イーザルデの名前において」頼んだので、トリストラントはもはやそれを拒むことができずに、競技に参加して見事な腕前を見せてから、その場を立ち去った。その日の夕方、マルケ王がその競技場に来て、その力の強い巡礼者の話を聞くと、それはトリストラントかもしれないと思って、彼を探させたが、彼はそのときすでにクルネヴァールと出会って、ブルターニュのカラヘスへの帰国の道を辿っていた。

7. ナムペーテニス王の奥方ガリーオーレ

そのカラヘスからそれほど遠くないところにナムペーテニス(Nampêtenis)という国王がいて、彼には美しい妻ガリーオーレ(Gariôle)がいたが、彼は嫉妬心が強く、いつも妻を城内に監禁していた。しかも城の周囲には高い城壁をめぐらせて、深くて広い三重の濠で城を取り囲んでいた。自分が狩りに出かけるときには厳重に鍵を締めて、その鍵は必ず

自分が持ち歩き、誰も妻に会うことを許さなかった。とりわけケヘニスに警戒していた。奥方のガリーオーレはこのナムペーテニスと無理やり結婚させられる前には、密かにケヘニスと婚約を交わしていたことを知っていたからである。

ある日、ナムペーテニスが狩りに出かけて不在だったとき、ケヘニスは胸壁に立つガリーオーレの姿が見える場所に出かけた。彼女は彼を見て会釈すると、彼女も会釈を返して、二人はせめてひとときでも一緒にいられたらどんなに幸せであろうかと、互いの想いを語り合った。ケヘニスは彼女の言葉を聞いてから、その望みを実現するにはどうすればよいかを日夜考えていたところ、トリストラントの示唆に従って、彼女に城の鍵の鋳型を取ってもらって、それで合鍵を作ることにした。これでケヘニスの憂いはすっかりなくなり、元の快活さを取り戻したところで、このエピソードはひとまず中断し、その後の話はあとで再び取り扱われることになっている。

8. 旅芸人の装いで王妃を訪れる

ここでトリストラントは父王の訃報とともに、故国が大混乱に陥っている知らせを受けた。トリストラントは帰郷の準備を整え始めたが、王妃イーザルデに会えぬまま出発することなど耐えられないと思って、クルネヴァールとともに旅芸人の装いで王妃の国へ出かけた。まずはいつものようにティーナスを訪ねて、彼の手引きでトリストラントは、今回は例の果樹園の木の下で王妃と出会い、抱擁を交わし合った。翌朝、王妃に別れを告げて、船を停めている場所に帰ろうとしたとき、トリストラントはアントレートに見つけられてしまい、武器も持っていなかったこともあって、逃げ出したところ、幸い、川岸にあった小舟に跳び乗って、向う岸に渡ってアントレートの中から逃れることができた。

アントレートから報告を受けたマルケ王は、全土に見張りを立てさせて、トリストラントを捕らえるようにと命じた。ティーナスも自分の居城の近くで見張りに立っていたが、折りよくトリストラントを見つけて、密かに彼を城の中に入れて匿(かくま)った。一方、王妃はトリストラントが捕まるのではないかと心配でたまらなかったが、ちょうどそのときハウプト(Haupt)とプロート(Plôt)という、賭け事に負けて困っている二人の旅芸人が城に来た。王妃は彼らに事情を話して、トリストラントとクルネヴァールが着ていたのと同じ服装を身に着けさせて、わざと見張り人に捕らえられるようにと頼んだ。こうして二人の旅芸人は捕らえられて、訊問に当たったアントレートには、王妃の指示どおりのことを話した。二人の証言は一致していたので、アントレートは自分が見たのはこの二人の旅芸人であったと思い込んで、二人を解放したうえ、マルケ王には自分の思い違いであったと謝罪した。王妃の計略はうまくいって、トリストラントはクルネヴァールと一緒にカラヘスに帰って行くことができたのである。

9. 故郷への帰国とその後のトリストラントの負傷

トリストラントはカラヘスに到着すると、ただちに三百の軍勢を引き連れて故郷へ帰り、争いごとや揉(も)めごとをことごとく収めて、そこで二年以上の歳月を過ごした。そのうちトリストラントはその国をクルネヴァールに委ねて、自らはカラヘスへと帰って行った。その間に舅と姑はすでに世を去り、ケヘニスには戦乱の真っ只中に巻き込まれていた。あのリーオーレ伯が再び勢力を取り戻して、暴虐の限りを尽くしていたのである。ケヘニスは義弟の帰国を喜び、トリストラントの妻も同様であった。トリストラントは軍勢を整えて、リーオーレを迎え撃ち、敵に大きな打撃を与えた。今やトリストラントに刃向かうのはただ一つの町のみであったが、その町の塔を攻撃した際、トリストラントは弩(いしゆみ)の石が命中して、気を失い倒れてしまった。ケヘニスは急ぎ医者呼び寄せて、手当てを施させたが、トリストラントはその後一年以上も快方に向かわぬまま、病の身を横たえていた。昔の美しさは見られなくなり、これがトリストラントであると見破る者がいないほどの変わりようであった。

10. 道化師の姿で王妃のもとを訪れる

それでもようやくトリストラントは馬に乗れるまでになり、自分の国から連れて来ていた少年と一緒に海辺まで出かけたある日のこと、海の彼方のコーンウォールの方角に目を向けて、王妃イーザルデのことを口にする、少年が事情を尋ねた。子細を聞き知った少年は、すっかり姿が変わってしまった今こそ好機だと励ましながら、道化師の姿で王妃のもとに出かけることを提案した。そこでトリストラントは道化師の衣装を探して着込み、大きな杖を手を持って、港へ出かけ、コーンウォールから来た多くの船の間を回っているうちに、ティンタヨーエル生れの商人に見つけられた。この商人はその道化師を国王夫妻に献上しようと考えて、道化師を船に誘って、コーンウォールに向けて出発した。

船がティンタヨーエルに到着したとき、ちょうどマルケ王が浜辺を散策していて、その道化師を宮廷に連れ帰った。道化師を装ったトリストラントは王妃の前に進み出て、言葉巧みに本物の道化師のように振る舞っていたが、やがてマルケ王がその場を立ち去ると、王妃に指輪を見せて、自分こそトリストラントだと訴えた。王妃はついに彼の本当の姿を見分け、その道化師に自分の部屋のある建物の階段の下で寝起きするように命じた。こうして二十日あまりの間、トリストラントは昼間は道化師として人々を楽しませ、夜は王妃とともに過ごしたのであった。しかし、そのうち二人の役人がその密会に気づいて、さらに三人の仲間を味方に引き入れて、道化師を捕らえようとした。トリストラントはこの見張りに気づいたが、それに憶することもなく王妃のもとに忍んで行くのを止めようとはし

なかった。彼は杖を振り回しながら王妃の部屋に入って行ったので、彼らは手が出せなかった。しかし、トリストラントはいよいよ別れを告げるときがきたと思い、悲しみに暮れながら、優しく抱擁を交わし合うと、王妃の部屋を立ち去って、カラヘスの国へと帰って行ったのである。

11. ケヘニスとガリーオーレの逢瀬

カラヘスに帰って来ると、トリストラントが錠前職人に頼んでいたナムペーテニースの城の合鍵はすでに出来上がっていた。それまでケヘニスとガリーオーレは相思相愛の仲でありながら、いまだ逢瀬を実現することができなかった。そこでケヘニスは、よく晴れた日にナムペーテニースが狩りに出かけると、トリストラントを伴ってガリーオーレの閉じ込められている城へ行った。二人が城の門を開けて中に入り、濠の上にかかった橋を渡る時に、風が吹いてきてケヘニスの被っていた帽子は濠の中に落ちてしまった。二人は侍女たちに出迎えられ、ケヘニスはガリーオーレと一緒に別室に入って行ったが、その間トリストラントは室内で得意の小枝投げの技を見せて、侍女たちを楽しませた。楽しい時間はあっという間に過ぎて、ケヘニスがガリーオーレに別れを告げて別室から出て来ると、トリストラントは彼と一緒に城をあとにした。

やがてナムペーテニースは狩りから戻って来たが、濠の中にケヘニスの帽子を見つけ、また室内でトリストラントの小枝が壁に残っているのを見つけると、自分の留守中に彼らがやって来たことを悟り、妻に問い詰めた。妻は嫌々ながら手籠(てごめ)にされたと自白した。するとナムペーテニースは激怒して、七人の家来を引き連れて、二人のあとを追いかけた。ケヘニスとトリストラントに追いつくと、ナムペーテニースは戦いを仕掛けた。ケヘニスは三人の敵を倒したものの、ついには殺されてしまった。トリストラントは残る四人を討ち取ったが、ナムペーテニースの二本の毒槍で重傷を受けて倒れてしまった。ナムペーテニースはその場を立ち去った。

この知らせがカラヘスの国に伝えられると、白い手のイーザルデは深い悲しみに沈んだ。彼女は兄ケヘニスの死骸を埋葬する一方、有能な医者を探し求めてトリストラントの傷の治療に当らせた。しかし、トリストラントの傷はたいへん深く、マルケ王の妃イーザルデ以外には誰も治せないのであった。

12. 王妃イーザルデへの使者

トリストラントは自分の傷が王妃イーザルデのほかには治せないと知ると、一人の男のもとに使いを送った。その男はティンタヨーエルから一緒について来た者であった。その男がやって来ると、トリストラントは王妃のもとに使者として旅立ってほしいと頼んだ。

男は快く引き受けた。トリストラントは自分の使者の証拠として例の指輪を彼に渡したあと、さらに戻って来るときに、王妃が一緒なら船に白い帆を掲げ、一緒でない場合には黒い帆を掲げるようにと指示した。そのうえさらに続けてトリストラントは、男の娘を毎日海辺に行かせて、船の帰りを待ち受けさせて、帆の色を見たら、ただちに自分に知らせるようにと頼んだ。男は娘に指示どおりするように言い付けてから、船出して王妃のもとに急いだ。王妃は使者からトリストラントの伝言を聞き、指輪を見ると、国王のことも、名誉や衣装や宝物も、一切のものを棄てて、ただ治療に必要なものは忘れずに、使者とともに船に乗ってカラヘスへと向かった。

13. 白い帆

一方、使者の娘は一日中、父の船の帰りを見張っていた。白い手のイーザルデはこのことを誰から聞いたのか、ある日、その娘に向かって、父上の帰りが分かったら、その船の帆の色をすぐさま自分に知らせるようにと言い付けるとともに、父上が帰り着くまでそれをトリストラントには隠しておくようにと、厳しく命じておいた。やがて娘は白い帆を掲げて戻って来る父の船を目にすると、奥方のもとへ急ぎ、そのことを報告した。奥方はそれを聞かぬや否や、トリストラントの枕元へ行って、使者がこちらに向かって戻って来ていることを伝えた。トリストラントは喜びに溢れ、身を起こして、何色の帆を掲げているかと問いかけた。奥方は「帆は白色ではありません」と答えた。それを聞くと、トリストラントはすぐさま床の上があつくりと頭を落とし、まもなく息を引き取ってしまった。それを見て奥方は、夫の死が自分の過失から生じたものであることを悟って、大きな嘆き声を上げた。これと同時に哀悼と嘆きの声が町中に起こった。トリストラントは美しい御堂の中に運ばれて、立派な棺に安置された。

14. 愛の死

王妃イーザルデは船から降りて陸に上がると、御堂から響いて来る鐘の音を聞いて、トリストラントが亡くなったことを知った。彼女は心臓に激しい痛みを覚えて、黙ったまま、棺に近づいた。その傍らではトリストラントの妻が泣いていた。王妃は、「奥方様、どうぞそこを退(ど)いて、私に近寄らせてください。あなたよりも私の方こそよりたい皆さんの理由をもって嘆かなければなりません。私の方がより多く愛していたのですから」と言うことから、棺の蓋を開けると、無言のまま、トリストラントの亡骸の上に自らの身を重ねて、息を引き取った。この王妃の胸を扶(えぐ)られるような死に方を見たとき、トリストラントの妻である白い手のイーザルデは慟哭(どうこく)した。すべての人々もこれに声を合わせて泣いたのであった。

やがてマルケ王はトリストラントと王妃イーザルデが亡くなったことを知った。また二人を結び合わせた相互の愛についての知らせも、さらにはその大きな愛をもって結ばれたのが実は秘薬の力によるものであったことをも聞き知った。そのときマルケ王は、なぜもっと早くそのことを知ることができなかったのか、なぜそれに気づかなかったのかと、悔やんだ。彼は使者とともに海を渡って、二人の亡骸を自分の国へ運んで帰り、埋葬した。そのとき彼はイーザルデの亡骸の上にはばらの木を植えさせ、トリストラントの亡骸の上にはぶどうの木を植えさせたところ、やがてその二本の木の枝は同じ背丈に伸びて、がっちり絡み合い、纏れ合っていたので、引き離すことができなかったという。これもすべて秘薬の力によるものだと言われていると記して、アイルハルトの作品は終わっている。

15. トマにおける白い手のイズー（イザールデ、イゾルデ）の物語との比較

このようにアイルハルトにおいては白い手のイーザルデにまつわる物語が完全なかたちで展開されているが、ゴットフリートではトリスタンが白い手のイゾルデへの愛と王妃イゾルデへの愛との板挟みに挟まって苦悩する場面で中断している。幸い、同じトリスタン伝説の原典(エストワール)を素材に用いたトマの作品が遺されていて、ある程度その後にはゴットフリートにおいて予定されていた展開が推定されるものの、トマの作品についても白い手のイズー（イーザルデ、イゾルデ）にまつわる物語については、断片で遺されているだけである。具体的に言えば、「大胆な水」のエピソードはトリノ写本の断片で、「王妃イズーの行列」のエピソードはストラースプール写本の断片で、「侍女ブランガン（ブランゲーネ）の怒り」のエピソードはドゥース写本の断片で、「癡病みの装いで王妃を訪れる」エピソードと「苦行者の装いで再度王妃を訪れる」エピソード、それに「小人のトリスタン」と「重傷のトリスタン」、さらには「白い帆」のエピソードは同じドゥース写本の断片で、最後に位置する「愛の死」のエピソードはドゥース写本の断片とスニード写本の断片で語られているに過ぎないのである。

しかし、それらはすべて断片で語られているに過ぎないとしても、そこで展開されているエピソードはいずれもアイルハルトの作品とは著しく異なった展開を見せていることだけは容易に推定することができる。

たとえば、アイルハルトにおいて展開されている「魔法の枕」のエピソードはトマの作品には取り入れられておらず、その代わりにトマの作品ではカエルダン（ケヘニス）と侍女ブランガン（ブランゲーネ）にまつわるエピソードが展開されていたことが、トリノの写本やドゥース写本から推定される。またアイルハルトではトリストラントが王妃イーザルデを、一回目は「病人の装いで」、二回目は「巡礼者の装いで」、三回目は「旅芸人の装いで」、四回目は「道化師の装いで」訪れるが、トマでは「癡病みの装いで」と「苦行者の

装いで」二回訪れることになっている。もちろんそのほかの装いで訪れる場面はトマでは紛失されている可能性もあるが、いずれにしても両者ではその展開の内容が多少異なっていると考えるのもよいであろう。またその際、アイルハルトではコーンウォールに王妃イーザルデを訪問するのであるが、トマではロンドンにいる王妃イゾルデを訪ねることになっている。この王妃訪問の間にアイルハルトでは、「ナムペーテニス王の奥方ガリーオーレ」とそのあとの「ケヘニスとガリーオーレの逢瀬」のエピソードが組み込まれているが、トマの作品ではそれらは取り扱われていないと考えるのもよいであろう。アイルハルトではまさにこのガリーオーレをめぐるエピソードの中の戦いでトリストラントは致命傷を負い、それが「白い帆」のエピソードと「愛の死」のエピソードへと繋がっていくのに対して、トマの作品ではアイルハルトには見出されない「小人のトリスタン」のエピソードにおける戦いの中でトリスタンは致命傷を負って、それが「白い帆」のエピソードと「愛の死」のエピソードへと発展していくからである。アイルハルトではガリーオーレをめぐる戦いでトリストラントのみならず、ケヘニスも命を落とすことになっているので、「白い帆」のエピソードで王妃イーザルデを呼びに出かけるのは、トリストラントがティンタヨーエルから一緒に連れて来た男である。これに対してトマではアイルハルトでのケヘニスにあたるカエルダンとなっている。

このようにアイルハルトとトマの間ではかなり物語内容が異なっていることが理解できよう。ゴットフリートの作品でも書き続けられていったとしたら、アイルハルトとは著しく異なった「白い手のイゾルデ」の物語が展開されていたに違いない。中断で終わっていることは、まことに惜しいことである。

結び

以上のように見てくると、アイルハルトの作品は、十二世紀半ばにイギリスあるいはフランスで成立したと推定されるトリスタン伝説の原典(エストワール)において展開されていたすべての物語——「主人公の出生と養育と修業の旅」、「マルケ王の求婚」、「恋人たちの逢瀬」および「白い手のイゾルデ(イーザルデ)」という四つの物語ブロック——を語り伝えているところに、まずはその存在価値がある。しかもそこで語られている内容は、同じトリスタン伝説の原典(エストワール)を用いたとされるトマの作品や、そのトマの作品を素材に用いたゴットフリートの作品とは著しい違いを見せていることも明らかである。

主人公トリストラント(トリスタン)の父親のリヴァーリン王についても、アイルハルトではスコットランドの南東部あるいは南ウェールズにあるローノイスの王とされているのに対して、ゴットフリートではブルターニュにあると考えられるパルメニーエの王として登場し、しかも前者では主人公の誕生後も生き延びてその後の物語にも多少なりとも関

与しているのに対して、後者では主人公の誕生前にすでに戦死することになっている。主人公が成長して、やがてコーンウォールのマルケ王のもとに行くことになるまでの物語、そしてそこでアイルランドのモーロルトと戦い、毒槍の傷を負い、アイルランドへ出かけて傷を治してもらったのち、コーンウォールに戻って来るまでの物語についても、両者の作品では著しい違いがあることは、本論で述べてきたとおりである。特に前者ではケルト社会をほのめかすような雰囲気が色濃く残っているのが特徴であるのに対して、後者ではどちらかと言えば、中世騎士社会の雰囲気が至るところに感じ取られるのである。

やがて主人公トリストラント（トリスタン）がマルケ王の花嫁を求めて旅立つエピソードでも、アイルハルトではケルト伝説に由来すると考えられる「二羽の燕がもたらした髪の毛」のエピソードが用いられているのに対して、ゴットフリートでは主人公に反感を持つ宮廷の顧問官たちが彼に難題を押し付けるエピソードに変えられている。敵国アイルランドに辿り着く経過も、またそこでの竜退治のエピソードも、さらに主人公がアイルランドの姫イーザルデ（イゾルデ）をマルケ王の妃とするまでの経過についても、本論で述べてきたように、両作品ではかなりの相違がある。特にそのあとトリストラント（トリスタン）とイーザルデ（イゾルデ）の二人がコーンウォールに向かう船の上で飲んだ「愛の媚薬」については、前者では秘薬の効き目に四年間という期限が付けられているのに対して、後者ではそのような期限は付けられていない。従って、その後の展開に相違が生じてくるのは当然のことである。この「愛の媚薬」の点で前者の方がよりケルト伝説に由来する傾向が強く、後者は中世騎士社会の雰囲気が強くなっていると言える。

そのあと展開される「恋人たちの逢瀬」においても、恋人たちがマルケ王の監視から逃れて逢瀬を重ねる合図には、アイルハルトでは小川に十字の印を付けた木片を流すのに対して、ゴットフリートではトリスタンの頭文字のTとイゾルデの頭文字のIを書き込んだ木片を流すことになっていて、どちらかといえば、後者の方がより技巧的であり、より宮廷風である。そして恋人たちの逢瀬が暴露されてしまい、それぞれ処刑に処せられるが、その処刑を免れるまでのエピソードにしても、前者はケルト伝説風であるのに対して、後者は新しいさまざまなエピソードが挿入されて、より宮廷的な色彩の強いものとなっている。その後の森での生活とそこでのあらすじの展開についても、前者ではケルト伝説の雰囲気が多く残っているのに対して、後者では森の中の「愛の洞窟」の生活が中世騎士的な「ミンネの女神」の導入によって展開されていて、より宮廷的騎士的であると言える。

最後の「白い手のイーザルデ（イゾルデ）」についても、トリストラント（トリスタン）が白い手のイーザルデ（イゾルデ）と結婚したのち、彼女の兄ケヘニス（カエルダン）と一緒にコーンウォールの王妃イーザルデ（イゾルデ）を訪問して、やがて致命傷を負って「白い帆」のエピソードと「愛の死」のエピソードへと繋がっていくという大筋では同じで

も、そのほかの点ではアイルハルトとゴットフリートとではかなり異なったあらすじの展開となっている。特に主人公たちの二人の恋人たちが死んでしまったあとの最終場面については、アイルハルトでは明らかにケルト伝説に由来する「纏れ合う二本の木の枝」のエピソードが踏襲されているのに対して、ゴットフリートが素材としたトマの作品の中にはそのようなエピソードは織り込まれていない。この点でも前者はよりケルト伝説風であると言えよう。

以上のとおり、アイルハルトの作品の中には全体にわたって最初から最後までありとあらゆるエピソードが織り込まれており、十二世紀半ばに成立したと推定されるトリスタン伝説の原典(エストワール)の全貌がこのアイルハルトの作品によって概観できるところに大きな存在意義があると言えよう。そして描写の方法についても、ゴットフリートが主人公たちの内面を詳しく描いている傾向が強いのにに対して、アイルハルトでは、どちらかと言えば、物語をスピーディに展開させており、淡々と物語が進んでいるところに特徴があると言ってもよいであろう。

なお、このアイルハルトの作品は十二世紀後半以降に韻文で写本に書かれて特に騎士階級の間で伝承されたものであるが、十五世紀になって印刷術が発明されると、散文に書き改められて印刷によって民衆本『トリストラントとイザルデ』(1484年印刷)¹³⁾として庶民の間にも広まっていくこととなる。この民衆本の内容はアイルハルトのそれとほぼ同じ展開であると考えてよいが、もちろん登場人物の名称や地名等は十五世紀当時の表記となっているものが多いほか、韻文版の簡潔な会話の場面が冗長な叙述文に書き改められたり、またところどころで作者自身のコメントが差し挿まれたりして部分的に改作が施されて、韻文版とはまた異なった印象を与える作品となっていることを付け加えておこう。

(2012・8・25)

※本稿を執筆するにあたって、登場人物等のカタカナ表記についてはそれぞれの作品の中高ドイツ語の読み方に従うことを原則とするが、しかし、特に国名や地名については一般によく使われている表記(たとえば、イルラント→アイルランド、コルネヴァール→コーンウォール等)としていることをお断りしておく。

¹³⁾ わが国でも邦訳がある。小竹澄栄訳『トリストラントとイザルデ』国書刊行会 1988年。

